

俳句雜誌

令和四年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第三号

水 月

2022 3月号



《今月のかな女》

雛好きの母見ぬ室となりしかな

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

昭和三年作の掲句であるが、前年の二月に母を亡くしたかな女にとっては、まことに心淋しい雛の節句であったと思う。この句に書かれているように、母上もかな女と同じかそれ以上に雛人形が好きだったようだ。その時季が来て雛を飾ると何時も母が来て、一緒に愉しんでいたのに、いま雛壇の前にはその母が居ない。母がいてこそその雛祭であったことを実感するかな女であった。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

寒禽葬るからくれなるの花の樹下

大橋 迪代

冬でも庭に色々な小鳥がやってきて、千両・万両・南天や青木の実などを啄んでゆく。庭の景観に欠かせない赤い実が食べられてしまつて困つたものだが、餌となる木の実や昆虫類が乏しくなつた冬場では仕方ない。或る日の朝、庭木の下に一羽の鳥が屍を曝していた。それを憐れみ、深紅の花の木の根元に懇ろに葬つた。筆者は、冬の鴟を想定した。
(鬼之介・推薦)

水 明

令和 4 年
3 月 号

今月のかな女

華の一句

不動明王(作品)

ひとコマ漫画(近詠)

薄ら陽(近詠)

冠木門 ✳️主宰作品の鑑賞

硯箱 ✳️季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

山本鬼之介

星野和葉

吉住光弥

境延昭

井口俊晴

網野月を
石山かつ子
石井喜恵
ほか

梅澤佐江
松井由紀子
森川義子
ほか

井上玲子
野田静香
近藤徹平
ほか

網野月を

堀田季何

1

4

6

7

8

10

12

19

24

28

30



水明集

西幅公子 染谷正信
 曲淵徹雄 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

山紫集

52

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

58

俳誌望見

梅澤佐江

31

句集喝采

近藤徹平

32

水明例会報・各地句会報

61・64

一一〇〇号記念作品募集

69

全国大会のお知らせ

70

全国大会兼題句募集

71

春の吟行会のお知らせ

72

風声・発展基金御礼

73

後記

74

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

不動明王

山本鬼之介

全開の孔雀に会ふも春寒し

人形に入魂の眼を冴返る

下萌の更地三角三業地

遁走の野火をとどむる青不動

南から春一番と旅一座

燃えつきし恋よびさます牡丹の芽

語らうてゐるか日永の比翼塚

練堀の内へ消えゆく石鹼玉

ひとコマ漫画

星野和葉

漫画館におどける巨匠春隣
春光や時事漫画に羽生ゆるなり
大賞の絵に鰐もマスクを館うらら
大胆に躍るアマビエ春の色
春色やひとコマ漫画句に通ず
館を守り共にほほゑむ紅梅よ
楽天の墓地にキャラ寝ぬうららし

オミクロン株の急拡大で落ちつかない日々。花の無い時季ならいつそ花の無い盆栽村をと訪ねる。村といっても住宅と寄り添っていて、しかも人の気配を感じさせない程静かな佇まいだ。中ほどに市立漫画会館があり寄ってみる。ここは、日本の漫画の礎を築いた漫画家・北沢楽天の晩年の住居の跡地に建てられている。中には、当時の画室がそのまま残されており、楽天の描いた風刺漫画の数々や日本画など、又毎年募集する一枚漫画の入選作品が展示されている。ジュニアから一般人の作品で、思わず笑ってしまう。楽しいひとときであった。

薄ら陽

吉住光弥

薄れゆく故老の記憶牡丹鍋
現し身にたまりし憂ひ煮凝れる
たたなはる身の刺除^のかん水つ洩
痛む喉眠れぬのどや地吹雪来
蓮の骨は万の鏽槍構へなす
へブンアートの楽は青眼枯蓮に
薄ら陽に瞬の影見せ冬の蝶

近頃は年齢のせいもあって皆様のお力添えで何とか最小限の務めを果たしている状況です。俳句自体に対する向上心とか探求心が減少しているとは思って居ないのですが、然しこれも体力あつてのこと、今回も視界が毎日の生活とか病院の往復などに限られてしまいました。負けずに更なる気持で頑張りたいと思つて居ります。御指導の程。
元号の四つを生きて初詣

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

十二月号

髪に草の実類にめしつぷ吉野山

古事記に「大和は国のまほろば……」と記された奈良、京都の雅とは違って日本の原風景を思わせる。中でも県中部に位置する吉野山は桜の名所で知られる。後醍醐天皇以降四代にわたる南朝朝廷の所在地で史跡に富む。園児が駆け回る景で詠む吉野山が新鮮である。次の「助教熱弁秋たけなはの古墳群」とセツトで詠まれている。「まほろば」の今の世の長閑な景である。

ゆく秋や産寧坂のめぐりあひ

産寧坂は京都東山の清水寺の参道の一部、四十五段の石段の坂である。別名三年坂、坂下の北には二年坂その先は高台寺から八坂神社に抜ける評判の観光路である。清水寺子安塔への安産祈願の道であったのが産寧坂の名の由来。そこでのめぐり逢い、昔の恋人だったかもしれない。

継目なき梁二十間すきま風

タイトル「豪農屋敷」はこの句に因る。新潟の伊藤家の屋

敷か。一千町歩余の豪農で豪商、戦後の農地解放を機に市に寄贈され「北方文化博物館」として公開されている。二十間と言えば三十数メートル、減多にない大木である。六十程の部屋を持つ純日本風の屋敷に圧倒される。伊藤家に比肩する豪農は新潟をはじめ東北や北陸に多かった。土地集積の背景に過酷な冷害と小作人の存在を想わざるを得ない。伊藤邸にすきま風などある筈はない。下五に据えた季語に作者の冷めた目がある。

神の座へ初霜を踏む浅沓よ

浅沓は元は殿上人が束帯・衣冠・直衣など着用する際の履物、桐の木をくり抜き外側に黒の漆を塗ったもの、今は神官の装束として残る。雅に見えても履きにくそうである。引きずり気味に歩くのだろうか。初霜を歩く時無意識に足を垂直に下ろす。それが「踏む」足の裏で押し付ける感覚である。初霜と浅沓の微妙な違和感が句の躰である。

新羅琴ひびけ寒月冴ゆる夜に

新羅琴はそれぞれに琴柱を持つ十二弦の箏で正倉院に三面が遺る。新羅は七世紀後半朝鮮半島を統一、奈良時代に仏教

など大陸文化の移入に重要な役割を果たした。読み手には半島両国との緊張の現実が突き付けられる。

一月号

築地塀落葉に肩を貸すごとく

築地塀は外敵の侵入を防ぐための土塀の一種ではあるが石垣を台座に粘土と瓦などを交互に突き固め瓦屋根を葺いたもの。京都御所や西本願寺の外壁に用いられている。本来の防壁の用途を離れ、風格と言うか一種の荘厳美を醸す。その屋根に落葉が降り敷く景は谷中観音寺のものか。

作者には珍しい写生の句である。

師走名画座「寄らば斬るぞ」の名台詞

名台詞「寄らば斬るぞ」の出所に辿り着けないでいる。新国劇創始者の澤田正二郎がさる場所ですら実際に口にした言葉とも聞く。剣劇を大衆演劇として定着させた新国劇をこよなく愛する作者のこと、数ある演目にある台詞と思う。物騒ではあるがこれぞ剣劇、新国劇の領域であろう。

煤逃やかかつて愛国婦人会

愛国婦人会は明治三十四年、前年の義和団事件を受け発足。当初は皇族貴族が会員であったが日露戦争を機に一般市民の参加により会員増加、兵士慰問や遺族救援に止まらず慈善などの社会活動も担っていた。対米開戦後の昭和十七年、他の

大日本国防婦人会などと共に「大日本婦人会」として大政翼賛会の下に統合再編された。句に登場の「婦人会」はテレビドラマでお馴染みの数人が徒党を組み土足で踏み込んでくる強面のおばさん達同様、再編後の婦人会である。

煤逃と取合せで詠むには陰湿な記憶がありそうで、この手の輩からは当月のタイトルどおり「逃げる」が勝ちである。

グラビアの女優に恋し古曆

男には誰しも思いのあること。お目当ての女優のグラビアを自室の壁に張った。グラビアの顔を見ると二人きりで見つめ合う気分になったものである。単なるファン心理を超えたセクシユアルな通過儀礼だった様に思う。

雪明り「山と川」てふ合言葉

紛れもなく赤穂浪士の吉良邸討ち入りの場面である。元禄時代、実際にあった事件を元に人形浄瑠璃・歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」、講談では「赤穂義士伝」として上演された今に至るまで映画やテレビを含め人気抜群の演目である。発端は江戸城松の廊下での浅野内匠頭の吉良上野介への刃傷沙汰、吉良邸はこの事件により元の呉服町から本所へと上屋敷の家替えがされた。その本所の吉良邸も二千五百坪の広さ、現在その一部が本所松坂町公園に残る。討ち入りの四十七士が邸内で同士打を避ける合言葉が「山と川」であった。討入りの総大将大石内蔵助役など多くの名優たちが三百年余に至るまで演じ続けている。

その場面を俳句で詠んだのは作者が初めてだとおもう。

硯箱

◆季音十二月

井口俊晴

流星も火球も見ずの早寝かな

栢尾さく子

若い頃に比べ寝るのが早くなった。私なんか夜は十時ごろに寝てしまつて、その代わり朝は五時前に起きたすことも多くなつた。その結果、作者のように「ふたご座流星群」とか去年十二月にニュースにもなつた「火球」を見ずに寝てしまふことになる。作者は「生も死も永遠の秘めごと星流る」とも詠んでいるのだが、いかんせん眠たくなってしまつては、天体ショーどころではないのである。

隼人瓜数多生らせて主留守

島津初花

なんと言つたらいいのか、中南米が原産でピーマンをちよつと大きくしたくらい。日本には大正六年に鹿児島に持ち込まれ、それから広まつたので「薩摩隼人」の隼人瓜なんだとか。別名が千成瓜と呼ばれるように、晩秋に一株から百個も二百個もの黄緑の実が取れるそう。一般家庭でも栽培でき

るため、この家のようにたくさん生らせて、ほつたらかしくいうこともありうる。

秋高し棟木に響く一の槌

矢作水尾

秋晴れの一日、木造家屋の棟上げ式があつた。最近あちこちで新築の家が増えているが、ほとんどがツーバイフォー住宅で、あつという間に出来上がつて、この家のように昔ながらの木組みの工事は滅多に見ない。ここでは、初老と思しき大工の棟梁が棟木に上つて、一の槌を振り下ろす。乾いた木が立てる音があたりに響くと、下で見ている発注者や若い衆達みんなが厳肅な面持ちで、棟梁の所作を見守つていた。古き良き時代を思い出させる。

里山の返す哢や猪撃たる

大場順子

郊外の里山にドーンと一発の銃声。ちよつと間があつて、哢が返つて来た。後は静寂……。猪による農作物の被害が増え

ている。最近は市街地に出没することも増え、登下校の小学生が鉢合わせすることも。このため、自治体は駆除に乗り出す一方、ハンドブックを作って、被害に遭わないよう、注意を促すようになった。先ほどの銃声は地元猟友会のものだろう。捕獲頭数は最近十年で十倍以上にもなっているそう。猪にとっては気の毒と言うほかない。

牧場の馬は孕みて冬うらら

山田美佐尾

太陽の光がまぶしく、冬であるのを忘れるような一日、高原の牧場ではお腹に子供を宿した馬がのんびり草を食んでいる。そこで、つい余計なことを考えたのだが、体が大きな馬って、妊婦さんみたいにお腹が膨らむのだろうか？調べてみたら、こんな記録を見つけた。出走予定の牝馬がレース前日に仔馬を生んだというのだ。父馬は不明で、関係者はびっくり仰天。このため、牝馬の調教師は管理責任を問われて戒告処分を受けた。因みに馬の妊娠期間は三三〇日だ。

蝕へて素肌うつくし冬の月

松井由紀子

地球が太陽と月との間に来て一直線となり、月の光る面が欠けること、それが月蝕だが、そんな分かり切ったことに大騒ぎしてニュースになる。つい先日テレビ局が何度も映像

を流していたっけ。月蝕の間、ちよつとザラザラと赤みを帯びていた月は、時間が経つと、雪白と言うか、鏡のように美しい素肌を見せてくれたのである。

冬茜キリン親子のシルエツト

宮崎チアキ

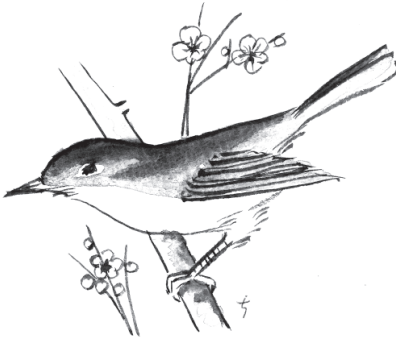
冬の太陽が今にも沈もうとしている。空は真つ赤に燃えて、息を飲むほど美しい。何年ぶりかで訪れた動物園は、名残り惜しそうな親子連れで、そろそろ混雑が始まっている。猿山で走り回っているニホンザル、檻の中を行ったり来たりしているライオン、象の目は眠たそう。そしてキリン舎の前まで来ると、キリン親子の長い首が、黒いシルエツトとなって、茜色をした空に浮き上がって見えるではないか。まるで影絵を見るように。

秋刀魚の目でんでうるさい焼き加減

川島典虎

きょうは秋刀魚を食べるぞ。いつもより高いとか小さいとか言われていても、秋刀魚は秋刀魚。みんなウキウキしている。だから自然に声が大きくなってしまふ。「ほら焼き過ぎて焦げているよ」「ちよつと生な感じが残っている方が美味しいのよ」とか、とにかくうるさい。焼き加減はそれぞれの人の好み、妥協はしないぞ。

季音雪



調神社界限 網野月を

青空や松葉に残る垂り雪
雪食めば僅かに埃臭きかな
支へある松自立する松雪しづく
水の水平確かめてゐる氷かな
寒の句碑一基の石となりけり

背伸び 石井喜恵

厨より背伸びして見る初日の出
霜柱踏んで弾んで登校児
ライブ果て頬の火照りや青木の実
文仕舞の書状ふせ置く雪明り
喪歸りの一步の重し雪明り

都 鳥 石山 かつ子

寒 大村 節代

ゆるやかに座せば公達都鳥
都鳥しづかに波を聞きをりし
波に浮く白の品格百合鷗
粉雪や円筒埴輪に灯が点る
床の間に武具の一領日脚伸ぶ

寒禽や大きく傾ぐ竹矢来
小面の美しき目ざし寒ざらへ
弁慶の具足を飾る寒牡丹
コーヒーブレイク鉄瓶に沸く寒の水
朝食はクロワッサンと寒卵

寒 禽 大橋 廸代

有り難う 小倉 倭子

読初の奥の細道朗朗と
差向ひあといくたびを薺粥
人馴れの遠流の島の寒雀
千代紙に包みて葬る寒の鶉
寒禽葬るからくれなるの花の樹下

「有りがとう」言へる幸せ初日の出
気負ひなく白磁に落とす寒卵
わが気魂一氣に飲み込む寒卵
日脚伸ぶ天神様の亀の首
日脚伸ぶすこし間延びの愛唱歌

雪 婆 栢尾 さく子

年 明くる 五 明 昇

北国や吹雪の底の大落暉
雪しんしん老いの鼻唄とめどなく
降雪予報知りて防御の手だてなく
雪婆のぞき見しをる玻璃の内
望郷の遠嶺まぶしく雪を着て

数へ日の賄方と毒見役
持越しの大願重き古曆
恙無き喜の字の祝屠蘇の酔ひ
初東風に絵馬の騒めく天満宮
板長が絵皿に咲かす河豚の花

寒 卯 菊池 ひろこ

八十路の胸 境 延 昭

寒卯「苞」の字ワープロ登録す
旧館と呼ばれ落葉の吹き溜まる
日の矢さす森を真近に成人式
初東風や常の着流し茶人めく
仏の座西へと翳りゆく野面

初硯八十路の胸の「夢」一字
艶福の夢は吉兆初明り
屠蘇酌むや三三九度の嫁が欲し
百人一首妻の口衝く恋の歌
八十路なほ新取の気概今朝の春

冬 椿 椎野美代子

年 新 た 鈴木康世

愛想なき庭のおあいそ冬椿
冬椿永らへゐたる日数かな
化粧ひても消ゆる口紅冬椿
蹲に挿しもす自適冬椿
冬椿一花茶室に処得て

初明り生きゐる証し深呼吸
香を焚き心静かに初日待つ
遠富士に手合はすことも年新た
七十余年の友の声なる初電話
椰一葉護符と賜る初社

雪 中 花 島津初花

孤 島 の 祠 田寺玲子

寒雷や目覚めの朝を減多打ち
大寒の蕎麦屋に溢るる胡蝶蘭
南天の実の鮮かに床飾る
灯籠の足下に添ふる黄水仙
寒椿悪夢納まる日を待てり

初御空くにうみの島まなかひに
初講義マニキュア赤き師の源氏
初凧や孤島の祠昼灯し
燭の焰や松籟高き阪神忌
寒晴や改修なりし長屋門

御 慶 十倉和子

松 明 け 西山 貴美子

高みより降る鳥声を御慶とも
鳶笛と海光まとふ初詣
鯨の骨格見上げてをれば虎落笛
宙吊りの白狐下りきて年祝ぎぬ
満天の星の見守る浮寝鳥

皇居宮殿松の間近く初鴉
ミルフィーユのごとき笠雲初富士に
お目見のパンダの仕種松過ぎて
「受付は終わりました」と白マスク
手長猿と隣り合はせに浜焚火

冬 の 嵐 永野史代

祝 箸 波多野寿子

裏口は日暮れの匂ひ枇杷の花
冬の虹消ゆればやがて父の忌が
父よ冬の嵐ですあなたの忌日です
臥す母のうつろな眼軒つらら
七日粥いつも厨に母の背

「満足」とおしやまな曾孫や祝箸
遠ざかる友の影追ふ寒雀
風花舞ふ髪染めの筆ふと置けり
凍て空に漆黒の城石落し
水仙や越前和紙の仄かな香

ジヨーカー 星野和葉

寒夕焼 矢作水尾

元日や一族の干支にぎやかに
襷ならぬエプロン持ちて礼者かな
ジヨーカーとおかめ蟬丸三が日
皿小鉢和洋折衷三が日
割烹着を晴れ着とせんや三が日

寒夕焼遠山なみの鋼なす
海光に干す白菜を真二つ
鷹の爪ちらちら赤き白菜樽
御料林深き闇からづくの声
寄せ鍋や父似母似の笑顔寄せ

上 天 気 茂木和子

春を待つ 山中みどり

上 天気蒲団まるごと陽の渦に
終活を本気でかんがへ年酒くむ
福笑ひ寡黙の髭より皓齒かな
お年玉しつかり握り紀伊国屋
大寒や銀河鉄道見送る灯

立ち上る君に貸す手や春隣
角砂糖紅茶に一つ春近し
春を待つ銀のフルートに跳ぬる指
ひとしきり百合鷗群れ吾妻橋
待春や薄紅色に爪を塗る

心新たに
柚木治子

寒
椿
吉住光弥

次世代へ託す蒔絵の雑煮椀
進水のごとき覚悟や新成人
初句会心新たに指を折る
精進の道半ばなり初句会
待春や磁器の音色の空真青

人ときに福引めける世に生きて
神ほとけ有難き世や福引も
寒椿日と燃ゆ紅き女帝塚
残り日を光背として寒椿
補ふ陀だ落らくの海見え岸の寒椿

初天神
由良ゆら女

窓開き天に始筆の夢一字
初泣や末は大器と囃さるる
猿の芸真似て輪に入る春着の子
「マネキン」にあやかりたしと初天神
寒濤やカフェの灯に聴く遠汽笛

☆

☆

季音月

天金の詩集

梅澤佐江

紅淡くしなやかに立つ初鏡
恙無き終の栖や青木の実
しづり雪曰く有り気な二人連れ
寒林に研ぎ澄まされてゆく五感
天金の詩集の背文字日脚伸ぶ

里日和

森川義子

寒林を抜けて光の湖映ゆる
臘梅の枝奔放に里日和
臘梅の終の住処に咲き誇る
高窓にさす有明の月冴ゆる
母と子の帯直し合ふ初鏡

冬日和

松井由紀子

映像のヒトラー獅子吼寒波来る
大寒や蒼天ぴんと張られたり
里の灯のみな懐かしき寒夜かな
採血の丸椅子温き冬日和
老医師と婦長のあ・うん冬日和

初騎

内田恵子

初富士に簪のごと雲のあり
初騎の馬の鬣編み上げて
モノクロの景を震はせ冬の雷
数学の解けぬ難問冬の雷
油絵具のさまざまな白雪景色

初風

大場順子

初風や進水式の楽高し
初風のひかりを進む走者かな
寒椿落ちし谷間の水走る
待春やガラスの瓶の帆掛け船
光の粒とばし春待つ水車

言の葉の海 丸山 マスミ

初詣長者寄進の大提灯
達観の百寿の賀状華やぎて
言の葉の海に遊ぶや初句会
曜変天目表紙を飾る初暦
縫初や今も健在糸切齒

祝事 鳥羽 和風

おぼこまで道着律律しき鏡割
御捻りを集めて囃す女正月
福寿草腹の曾孫に岩田帯
ある涙全部出し切る春芝居
蓋浮いて茶釜が喋る槽火かな

春待つ 高島 寛治

春待つや湖のほとりのカフェテラス
まづ晴と記してペン置く初日記
松過ぎの日記の余白持て余す
初御空SLどんと置かれをり
初写真いつも目を閉づ次男坊

淑気満つ 井上 燈女

朝日受け細る氷柱の水の息
初詣玉砂利を踏む奥の院
地藏牙ゆ綵身に願ひ札貼られ
雪明り刻を急がぬ大時計
内陣の闇をひそめて淑気満つ

農日誌 池田 雅夫

寒明を初日といたし農日誌
幾たびの挫折象る梅古木
銀箔をまとひ角ぐむ猫柳
草萌の岩老松の踏んばる根
喪に服し春寒のただ広き部屋

花詞 藤澤 喜久

七草や北に眠れる父の忌よ
閑節の悲鳴大寒へ身の構へ
冬帽子今なほ阪神タイガース
東京の雪は春待つ花詞
カーテンの日差しやはらか春隣

日の童 渡辺舍人

年一夜『草田男全句』蝶開き
剥きあぐる白色白光冬の梨
しんしんとみほとけと目が合うて雪
雪だるまらしきを手に載せ日の童
蟄居して老い冬眠のねぶりかな

札の辻 宇田白鷺

根梢燃ゆこきりこ舞ひの賑やかし
冬の陽のまぶしき道や札の辻
木の本の晴れし冬日や鮒釣り
元日や誰も降りない電車発つ
老梅や命ポツポツふくらみぬ

寒雀 森本早苗

山門の仁王の威光去年今年
寒雀百羽の愚痴と自慢かな
降り込みもまた目出度けれ初句会
樽風呂に駄伝を聞く二日かな
草引き十本無住寺の初詣

若水 松宮保人

「がらたて」の目立つ小春や札の辻
靖国へ詣で安堵の冬の暮
胡坐かくあるじ槽火に手を翳す
若水や静けき今朝の茶を啜る
大吉を当て妻燥ぐ女正月

寒稽古 山田美佐尾

花衣何れ姉やら妹やら
面取れば眉目うるはしき寒稽古
神住ふ阿蘇の山脈初霞
闇こがす左義長の城崩れんと
矢筋や如何ゆく流鏑馬の寒稽古

日向ぼこ 町野広子

遺影まで陽の届きたる日向ぼこ
棒パン抱き花枝の道帰る
木菟鳴きて宿坊の闇深うせり
一人寝の耳を澄ませば木菟の声
数へ日の人気ラーメン店に列

初詣 荒井俱子

白障子敷居を走る豆電車
白障子猫が横座で大あくび
讚美歌の漏れくるチャペル冬の薔薇
冬木の芽風に泣き癖ある日暮
願ひ事一つに決めて初詣

紀州手毬 松山清子

夫と見し東京湾の初日の出
初夢は焼け跡に立つ幼き日
読初は「おらおらでひとりいぐも」
髪結ひて父似の額成人式
頂きし紀州手毬のずつしりと

独り言 野口和子

寒晴や犬の鼾の密やかに
冬晴や女庭師の紅き髪
独り言聞かれてしまひシクラメン
枯葉積む中に平たく猫眠る
初詣露店焼きそば焼きあがり

初春 井関礼子

初日の出先づ恙無くをろがみぬ
七種を狭庭に摘むも峽に住み
寒晴や草木の憩ふ気配して
初糶や磯の香気の漲るも
小正月小鍋ふつつ小豆粥

冬木の芽 井口俊晴

摘まむなよでつかき未来を冬木の芽
チクタクと振り時計や冬木の芽
ゆりかもめ寄せては返す波の音
引つこ抜く葱の白さよ昼の月
コロナ禍の大气浄めむ冬の雷

初日記 西浦千枝子

此の家も小型車に替へ年新たに
度忘れの漢字の多し初日記
雪被る紀州の富士を車窓より
初詣先頭を行く妊婦さん
初仕事ロボットルンバ猫乗せて

冬 晴 川崎 道子

玉砂利を胎の子と踏む初詣
日溜りをひよいひよい弾む寒雀
寒稽古剣士見たいと無双窓
冬晴やジャズ流しつ壁を塗る
待春や夫と受け取る母子手帳

去年今年 上戸 千津子

船旅や寄せては返す去年今年
山里や砂切誘ふ初詣
来客に銚釐も忙し寒の入り
コロナ禍や盃洗も出ず三ヶ日
腕自慢の仲間集ひし小正月

寒 卵 岡野 順子

どこまでもぬくさのひそむ寒卵
親と子のぬくさ永久に寒卵
ほつとする喉越しとほる寒卵
寒卵ツルンと落とす白飯に
掌にそつと閉ぢこめ寒卵

特集

前衛俳句とは何か

21世紀の「前衛」を考える

堀本吟／秋尾敏／今泉康弘／岡田一実
川名大／田中亜美／千倉由穂／西川火尖
日野百草／堀田季何／森 凜柚

■高橋睦郎特別作品40句

新コーナー
ある日の俳人

伊藤伊那男
角谷昌子

■巻頭三句

星野椿

太田土男

和田華凜

関森勝夫

河村正浩

和田順子

■今月の華

駒木根淳子

四ツ谷龍

■俳句と短歌の10作競詠

依光陽子

佐藤弓生

■好評連載

藤枝リュウジ

575の散歩道

筑紫磐井

坂口昌弘

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

手のひらの江戸

■古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2022年4月号

3月19日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

初鏡 井上玲子

初鏡鶴の舞ふ帯胸高に
 文楽に誘はれはづむ初鏡
 卒寿まで生きて春着の裾捌き
 初松籟丹の橋による鯉の影
 寒林を行くや自づと静ごころ

納戸 近藤徹平

陶の牛納戸に戻る年の暮
 登山口には有刺鉄線雪の峰
 国後は目と鼻の先岬牙ゆ
 散会の窓辺に筑波日脚伸ぶ
 ペンションのオンザロックや軒水柱

雪女郎 野田静香

雪女郎自由に行き来番外地
 番記者の眼鏡し冬の星
 先客と香り分け合ふ探梅行
 臘梅や紙飛行機に香を乗せて
 寒晴やバンジージャンプ空を切る

妙なる思ひ 日高道を

よみがへる青春切符冬の旅
 去る雲に無常の定め年深し
 絶妙と微妙の狭間片時雨
 新編を待ちきれぬ夜虎落笛
 冬至粥真ん中に居る母の皺

初芝居 青木鶴城

妙齡の赤き襷や弓始め
 女正月話し上手と歌上手
 口先だけの平和宣言初芝居
 蒼天の光の器雪めがね
 冬萌や今朝の力の漲りぬ

絵馬 熊倉千重子

初景色 風に唸るよ絵馬の虎
コロナ禍の数値さて置き屠蘇祝ふ
初暦先づは句会の日を記す
気まぐれな風とロンドを舞ふ落葉
映画めくメタセコイアの落葉道

和み 大塚茂子

久びさに琴柱を立つる冬座敷
鐘牙ゆるる石に神秘の龍安寺
今か今かと蒲団干し待つ親ごころ
十人で囲む食卓 雑煮膳
軒つらつらつら落つる里の家

日向ぼこ 正木萬蝶

良禽の嘴 まろし寒卵
冬帽子ほつれ老いゆく恋心
遊女の心めばゆる日向ぼこ
眩しくて時には冥き日向ぼこ
日向ぼこ此処が地球のどまん中

初稽古 石川理恵

初夢より覚めていささか疲れけり
丁寧紅茶を淹れる二日かな
強風に耐へに耐へたる松飾
〇脚が気になつてゐる初稽古
寒雀一羽は少し距離を置き

初東風 河野はるみ

初東風や気象を癒す青き空
初東風や合格祈願の絵馬鳴らす
臘梅の今咲かんとやかをり充つ
臘梅や朝の出迎へほのかな香
春近し親子三代露天の湯

寒卵 石田慶子

寒卵店主猫背の定食屋
新聞紙静かにくるむ寒卵
手ばなせぬスマホ片手の雪の朝
基地局か氷柱三本干し竿に
たて笛でたたく氷柱のハーモニ

年始め 田中章嘉

新しき宮を祭りて年始
初日記先づは体調細細と
肉筆の賀状に声の滲みけり
初春や一升壘も横になり
寒の入大地身震ひ初めけり

女正月 飛永鼓

整ひし書体で記す初日記
紅をさすことも無かりて初鏡
番組のお笑ひに飽き福笑
訪ね来る人も老いたり女正月
居眠りの居間に独りの女正月

赤胴鈴之介 福田千春

忍耐や換気の窓のすきま風
つらら折りむかし赤胴鈴之介
鉄琴の音してドレミ氷柱打つ
三代の漬物小屋や長つらら
賑やかや尼三人の冬帽子

冬一日 宮崎紫水

児童らの列黙々と冬の朝
校庭に遊ばぬ生徒冬の昼
冬暮色教師消え去る孤愁背に
本めくる音ひしひしと霜夜かな
アルバムは枕の元に寒き夜

雪明り 宮崎チアキ

深閑と稲荷への路青木の実
口伝の味つけ今に節料理
外に出るや総身清しき雪明り
初乗りは車椅子から進みけり
北窓や寒紅梅の仄明り

お正月 下川光子

初釜や両手に余る楽茶碗
初点前亭主と客の親子かな
初釜の茶銘晴れやか「若き日」と
鏡餅子はさりげなく父の膝
顎撫づる令和四年の年男

白 椿 中野 疆

大寒よ引率の子ら一列に
凍つる夜のハッピーエンドのドラマかな
白椿落ちてわが庭落ち着けり
シクラメン上向きひしと抱きあふ
年賀状来てもさびしき年となり

初 鏡 野平 美紗子

初鏡八十路の皺こそわが人生
眉引きて楽しさうな子初鏡
雑煮盛る帰省の吾子にたつぷりと
風花を双手に受けて駈けゆく子
風花や母の背の子が手を伸ばす

雪 女 郎 瀬戸 雄二郎

アメ横は無国籍街冬帽子
上野駅十番ホーム冬帽子
飛び降りて転ぶもをりし寒雀
寒雀屋根から消えてソーラーパネル
ルージュ買ひに町へ出て来し雪女郎

お正月 後藤 綾子

きらきらと風花の舞ふ露天風呂
たつぷりと生きゐる人生お正月
初鏡まがふ事なく母の顔
初日さす老舗の棚のまねき猫
あたたかき図書館やさし夢育つ

初 曆 葛城 千世子

無関心一対三の寒雀
生初やライン動画に当惑す
稽古また中止を記す初曆
水仙花鴨賑やかにお喋りす
無造作に脱ぎしコートへ猫戯れる

拍 手 川島 典虎

父さんは写真係よ七五三
敬老の真つ赤なベスト拍手わく
玄関で鳴くが挨拶小鳥来る
遠郭公逝つてしまひし夫恋し
さす傘の次第に重し萩の雨

現代俳句鑑賞

網野月を

お降りと言いては刷く肩の雨

宇多喜代子

〔俳壇〕1月号・福茶より

中七にするには「刷く」を「のぞく」と読ませたら良いのであるが、ここはたとえ中六になっても、「はく」と読みたいと考える。それは座五の「肩の雨」を手で払う仕事を表現したいからである。中六を中七にすることなど作者にはいとも容易いことであろうが、敢えて中六にしている節がある。だとしても何度も声に出して読むと字足らず感が無くなっているのは誠に不思議である。他に「幼もかたぢばかりの大福茶」がある。

をさなごの怒りに初笑起こる

高柳克弘

〔俳壇〕1月号・握れぬ手より

近親の大人たちの慈愛の眼差しを想像させる。大人たちに囲まれた「おさなご」はどのようなことをしていても可愛らしいと捉えられるものである。「初笑」に對置するものとしての「怒り」であっても「おさなご」ならば許されるし、むしろ一層可愛らしさが増すというものであろう。景の設定と語彙の選択が絶妙である。

桃青忌入麵に腹温もるも

鈴木しげを

〔俳句界〕1月号・初しぐれ

いわゆる「忌」の句である。「桃青忌」ならば悼むというよりも、偉大な先人に肖る気持ちが強く働いているように感じられる。「桃青忌」の場合、ある景や現象を配合することが多いように思われ、掲句のように作者自身の心持を配合することは難しいと考えてきたのであるが、即物的な表現方法が、効果的に使用されているのではないだろうか。

胃の中に草石蚕が棲んで探求派

石口 栄

〔俳句界〕1月号・四方拝より

中七の季語「草石蚕（ちよろぎ）」は、植物というよりも梅酢に漬けた赤い「草石蚕」であり、正月料理の黒豆に混ぜてあるあれである。

「草石蚕」を正月に食した誰か、もしくは作者自身かもしれないが、誰かが探求派なのであろう。しかしながら「草石蚕」が黒豆の中で探求派としての存在感を有している、とも読めそうところが肝である。「棲んで」の効果の所為だろう。

乳房より乳汁より白し搗上る 高橋睦郎

〔俳句〕 1月号・餅正月より

「乳汁」と書いて「ちち」と読ませるのである。ルビが振ってある。搗き上がった餅は「乳房」より以上に白く、「乳汁」以上に白いのである。この白さを有している餅は、御目出度さや有難さを表している。加えて神聖さも感じさせる。民族が固有に持つ侵し難い「白」なのである。その「白」を母性に関連付けて表現しているのだ。

題「餅正月」もしくは全七句の連句から「搗上る」で餅を想像させて季感を引き出している。

天領の風引き絞る弓始 寺井谷子

〔俳句〕 1月号・弓始より

「弓始」の会場は、「天領」にある神社でもあろうか。元来「天領」は天皇の御料（地）のことで、明治になってから歴史を溯って江戸幕府の直轄地の御料所を「天領」と呼ぶようになった。想像するに西国筋那代の治める「天領」であろう。北九州の「天領」は外様雄藩に囲まれていて九州探題的な役割を担っていたのである。一段上の格調がある一方で、緊張感も感じられる。筆者は中七の「…風」で切れがあるように解釈した。

失ひし日々とりもどす冬桜 藤田直子

〔俳句四季〕 1月号・綿虫より

「失ひし」の強烈な表現が読者をびっくりさせるし、また戸惑わせもする。しかしながら、どのような状態であろうとも、「とりもどす」のであるから完全に失ったわけではなかったのである。記憶にはありありと残されていたのである。座五の季語「冬桜」が見事なほどに秀逸である。「冬桜」のイメージと本質が句全体をカバーしている。他に「尖りきれざる枯蓮の伏してをり」「綿虫やいつか肉体捨つる日も」がある。

多様性認め合ふ世へ敗戦忌 越田栄子

〔俳句四季〕 1月号・藤田直子佳作より

二十一世紀の世界を考えた時、作者の祈りにも似た思いを表現しているのであろう。「敗戦」した民族だからこそ、声を大にして言わなければならない事があるのである。俳句は現実肯定そのものなのであるが、掲句のようにこうしたプログラム倫理も詠み上げることが出来るのだ。

ひとすぢの電線掛かり冬桜 津高里永子

〔俳誌「小熊座」2月号・極星集より〕

上五の「ひとすぢの」が緊張感を作り出している。何筋もある電線ではないのである。むしろ実景なのであろうが、何筋も電線があるよりも一筋の方が返って「冬桜」の景を両断して、存在感が増幅されるようである。

『水明誌』を繙く（水明一月号）

堀田季何（『樂園』主宰・
現代俳句協会幹事）

失くさないように買はない手袋も

網野月を

実に不思議な句である。句の構造としては中七に切れがあるので、私がおかを買わないのは失くさないようにするためであって、手袋もその理由で買わないのだ、という句意になるのだが、句意がわかったところでこの句の半分しかわかった気にならない。

よくよく考えてみれば、モノは、買って所有してしまえば、それをいつか失くすか（紛失だけでなく、損壊や放出も含む、広義の「失くす」）、自分が先に命を失くすか、普通はどちらか一つの運命が訪れる。自分が当分死ぬ予定でなければ、所有しているモノを次々に失くしてゆき、喪失感の連続を味わうことになる。そして、特に失くしてしまいそうなものは、入手した時点で失くす定めであろう。

そう思えば、傷つけないためには傷つく原因を作らないのが一番、失くしてしまいそうなものは買わない方が良く、という賢明な判断に落ち着く。そう、「失くさないように買はない」のだ。もちろん、この理由で「手袋も」買わないのは、作中主体が大切な手袋を過去に失くしているからであろう。

組板の水の奔りや朝寒し

石井喜恵

モノというものは不思議なもので、長年そのモノを用いて（扱って）いると、他人が知覚できないことも気づけるようになる。剣豪のような達人にしかわからない境地があるのは知られているが、何も剣豪に限らず、普通の生活者が普通の生活行動上で特定のモノを扱っていれば、そのモノについてだけは達人の域に近づいていることは十分起こり得る。

例えば、この句では、組板がそういうモノに当たり、作者の分身である作中主体が、そのモノである組板を長年厨房で用いてきた人物に当たる。すなわち、作中主体は、ある意味、組板の達人である。それゆえ、組板を流す際の「水の奔り」を感覚的に熟知している。一日のどういう時間、どういう気温の時、どのように水は組板を奔るのか。複数の組板があれば、それぞれの組板の材質や状態による水の奔りへの影響も把握しているだろう。

下五「朝寒し」で、一句が定まる。台所仕事に慣れている読者なら作中主体に共感できるはずだ。ああ、冬の寒い朝だったら、蛇口の水は出方があだから組板の上をね……。

俳誌望見 梅澤佐江

『雪解』 令和三年二月号 通巻九〇一号

主宰 古賀雪江 神奈川県横浜市

昭和二一年虚子を師系に、皆吉爽雨が東京で創刊。「客観写生を基本に自然と人生を深く凝視する」を理念とする。(月刊)

主宰詠「初時雨」一五句より

菊活けてひそけさに坐す夕べかな

和室に菊を活け、仄かな香りと静けさの中に対峙するひととき。障子からの光はいつしか夕闇の迫る気配となる。「ひそけさ」の雅な表現に作者の凜とした暮し方が見えて来る。

白露や遺影いよいよ顕らかに

遠き忌を合はせ祀りぬ菊日和
草花や木々に宿り始めた朝露は白い粒のように見え朝日の中で儚く消えてしまう。深まる秋とともに遺影の方の面影が鮮明に浮かび喪失感が募る。合わせ祀るのは皆吉爽雨忌であろうか。澄んだ青空は佇いの良い先師のようであった。

あららぎの実を摘みてより秋ひしと

草の絮とんで入日の金の輪に

熟した一位の実は橙赤色で甘く食べると美味しい。実を摘み乍ら、秋の深まりゆく寂しさを心に深く感じている作者。沈みゆく太陽の金色の輝き、目映い光の輪の中へと飛びゆく草の絮、宛も輪廻転生の入口のような神神しさであった。

採血のわが血が黝し初時雨
母の文厚し時雨に端濡れて

採血は静脈から採るので体中に酸素を届けた後の老廃物や二酸化炭素により黒く見える。「わが血が黝し」と「初時雨」の季語で不安感を伴う心理描写を巧みに表現されている。子を思う親心はいつの世も変わらず、娘の病を案じての分厚

い文の端が時雨に濡れているのさえも切なく、母の涙に思えるのである。

花幽集 自薦 四名 各一〇句より

着陸す翼今宵の月に濡れ 岡田文字

月光冠そふ名月となりにけり 岡本欣也

聲遠集 自薦 一六名 各五句より

新薬を敷いて馬房に新馬待つ 村田 浩

鳥威河内奥まで晴れ渡り 浅田百合子

雪韻集 自薦 一一名 各五句より

夕風の触れて弾けし鳳仙花 名越奈緒

散骨と言ふ遺言書身にぞ沁む 西尾幸子

泉聲集 主宰選 一〇名 各四句より

柿日和隣村よりかよひ禰宜 岩口誠一

高原の山一色に芒波 佐伯敏子

雪間集 主宰選 四六名 各三句より

遺句集の余白に潜む秋の声 松本和枝

喜寿米寿卒寿の集ひ爽やかに 藤原しげみ

「観る・考える・表現する」を実践し、正に虚子が主唱した俳句作法上の理念、自然とそれに纏わる人事を無心に客観的に詠い、教えを引き継いで来られた事を全句を通じて実感させて頂きました。

句集喝采

近藤徹平

◆伊藤政美「雪の花束」

菜の花会

著者略歴 昭和十五年三重県四日市市生。同三十六年山口いさをの指導で俳句入門。同三十八年山口いさをを主宰「菜の花」創刊に参加。平成十五年「菜の花」主宰継承。句集『二十代』等八句集既刊。

著者のあとがきによれば機関誌「菜の花」が令和四年二月号で七百号を迎えるのを記念して、本句集を刊行した由。

人間のぬひぐるみ着て春の夢

棺に花を人生の特等席

われら金婚雪の枯木が花束

人生は短編集や春の星

白靴の汚るるやうに老いてゆく

著者が現世に距離を置き観察しようとする句が光る。第一句、人間は偶々ぬいぐるみを着て生活しているという寓意か。第二句、死後には特等席が待つ筈。第三句は標題句で、あとがきに金婚の日は「朝から近年にない雪が降った」と記す。第四句、人生は大団円のある大河ドラマではない。第五句、老いの皺は汚れではなく人生の勲章と筆者は考えたいが。

つくづく賢者もの言はぬ蝸牛

蝸牛吟遊詩人ともなれず

男気をかたちによれば蝸牛

人間にとつては無益無害の蝸牛に著者の信条を託したと思われる句が多い。「菜の花」の益々の発展を期待したい。

◆土屋秀夫「鳥の緯度」

青磁社

著者略歴 昭和二十六年長野県生。平成八年小沢昭一（俳号変哲氏「水酔会」）入会。同二十一年句友津川泉氏と「外縁」句会。その後現俳協木曜教室、同二十六年「山河」入会。

著者はあとがきに出版社の知人の紹介で「水酔会」入会、変哲宗匠は席題が出ると軽妙洒脱に会員を牽制したと記す。

折皺の通りに畳む初あかり

魂のところが苦い干し鰯

大阪の黒鯛泥臭く古典好き

財産は墓地一区画吾亦紅

白地図の白い山脈鳥帰る

蒲公英はすべての風に名を付ける

蝶生る闇にハサミを入れる時

第一句は最初の師に当る多芸多才の小沢変哲宗匠への追悼句とのことだが、筆者は一般的に解される生前の故人を偲ぶ句ではなく、偲ぶ会が予め故人が定めた式次第で行われた句意と解したが如何か。第二句、肝が魂に置き換ったか。第三句は大阪人全般を洒落のめした句ではなく、変哲宗匠譲りに著者の悪友を詠んだ句ではないか。第四句、人生を割り切れば全く同感である。第五句、地図の山脈と現地とを合せる効果を狙ったのか。第六句、歳時記には風の名が多い。第七句は変哲宗匠直伝の洒落を込めた句ではないか、凡人は闇にハサミを入れないからである。次の句集が大いに楽しみ。

山本鬼之介 選

水明集

地母神の深き眠りや大枯野
鳩の背をこぼるる雛の泳ぎけり
抽出に齒の金冠や母偲ぶ
つんのめる枯野の着地パラシユート
鳩の背に包まるる雛みじろぎぬ

さいたま 西幅公子

仲人の粹な都々逸金屏風
牧師の家は六畳二間日脚伸ぶ
除夜の宴明日より後期高齢者
五十年添うて乙夜の葛湯かな
シベリアの思郷の御霊白鳥来

染谷正信

おほつぴらに軋む江ノ電冬めける
初冬や鎮守の狛の尾に力
写経紙に沈む金泥夕しぐれ
飽きられし遊具のパンダ夕時雨
墓石に心の一字小春風

さいたま 曲淵徹雄

白鳥や暮色の影にこぼれ入る
柏汁の鮭の鱗を摘む箸
柏汁おかはり夜勤あと二時間
シナトラの甘き囁き聖夜かな
クリスマス場末のバーの赤電話

新 暦文

水槽のふぐ悠々と出番待つ
何とまあ雑なところに札納
赤き手や雑巾掛けの冬の寺
冬木蔭理科室にある人体図
万札に手足生えたりずわい蟹

反町 修

鞭声のかすかに聞こゆ霧の中
秋時雨源氏を偲ぶ切通し
金盃になみなみと注ぐ文化の日
臍で茶を沸かす少女や大根引
鮎詰めの出雲の宿舎神の旅

保坂翔太

通り抜け出来ぬ小径やお茶の花
火男のやうな顔して河豚雑炊
鴉潜り水面の雲を崩しゆく
昼月を背にして走る枯野道
読み切れぬかな女全集年流る

さいたま 笹本啓子

毛糸編む農婦まどかな灯の下に
飄飄と生きて枯葉の舞ふ御堂
鋏を打つ三寒四温乱れつつ
ほとほとと夫がそば打つ年の暮
知りつくす豆撒く男の半生記

熊谷 神田治江

取りあへず流離うてみる冬木立
薄色のニンフの棲まふ冬木立
数へ日の秒針速く回りをり
あるだけの記憶をさらひ年惜しむ
珈琲にミルクとかしして冬銀河

元田亮一

脳トレの神経衰弱冬座敷
一総を子より巻き取る毛糸玉
毛糸編む一目一目に愛込めて
喩ふれば「金」の一字の年暮るる
準備整ふ千支の置物年の暮

越田栄子

寒紅やグラスの縁をなぞる指
冬の宿くの字への字を書きをりぬ
梵鐘の五十回忌や冬温し
冬ざれのくぐる暖簾や三丁目
天狼や終着駅のアナウンス

若狭 檜鼻ことは

岩を打つ水音澄むや冬の山
枯蓮の群れ一様に首垂れ
ビル案内のロボット走る年の暮
歌ひ手の頬艶やかにクリスマス
名優が幕を閉ぢたる冬の暮

平塚 丸屋詠子

化学式諳んじてみる河豚の毒
設ひを替へて楽しぶ年の暮
漬け井もまた乙な味輪島河豚
点袋手づくりにして年の暮
ポンポンを付けて完成毛糸帽

高崎 原田秀子

かなしみを潜りて払ふかいつむり
厭きもせずつぎつぎ潜るかいつむり
行く年や晴れ着の仕付け解きをりぬ
利き猪口になみなみなと新走り
元朝や金の箔押し夫婦簪

さいたま 梅澤輝翠

金屏を後に笑まふ角隠し
グレースケリー眠る宮殿冬銀河
牡蠣筏の占むる一湾大鳥居
お宮の松に女かしまし冬日和
生真面目に牧師ギターを社会鍋

さいたま 橋本京子

牡蠣鍋や海の香りを独り占め
晴れの日の娘の門出金屏風
松飾る三味の音漏るる夕まぐれ
冬青空幼子連れの影法師
宴果て老舗旅館の金屏風

さいたま 村杉清吉

集落は夕映えのなか柿簾
大白鳥湖抱くやうに舞ひ降り来
大白鳥離水のときは荒々し
へら重くなりて葛湯の透き来たる
鮫鱈や縄文の世の面構へ

上尾 横山君夫

あんまんをほつかり割れば冬が来る
着膨れを前後に乗せてママの朝
アフリカへ続く冬空キリン舐む
木枯やウーバーバイク駆け抜ける
初雪や妊婦寂かに湯に入りぬ

本橋稀香

冬ばらの際立つ庭に足を止む
冬の月何故か反省うながさる
出航の波渡場に出でし冬の月
夕映えの波にたゆたふ都鳥
川つ際母子七羽の鴨ゆくや

さいたま 山岸久美子

貧血に伏して三晩の冬の月
新都心影絵と化して冬の月
日向ぼこ窓際族の猫二匹
この際もあの際もなく年暮るる
白菜の無人販売長屋門

清水桂子

冬枯れて移動のスパがやつて来る
山眠り跳ぬる兎の影絵かな
漆喰壁にその影落とし冬の蝶
樅の木にけふも蜘蛛の巣クリスマス
遠き日も母と二人のクリスマス

渋谷きいち

冬枯に満面の笑み野の仏
街路樹が聖樹となりてきらめきぬ
もみの木を飾る子もなし聖夜来る
着ぶかれて土手行く父子の影重し
深閑と大樹の影や冬館

篠崎紀子

寄鍋や下戸も上戸も上機嫌

東京 鈴木和子

鱈酒と白子のマツチ夫と酌む

冬夕焼見むと窓辺に佇つ慣ひ
篋の中を彼方此方冬の鳥

さいたま 斎藤みよ

年の瀬や出来上上の今年味噌

トリムコース抜きつ抜かれつ息白し
リュック背に旅立つ朝息白し

箇条書の予定けしゆく年の暮

息白し帰路に星空眺めつつ

只の風邪を願ふをかしさ熱の夜

さいたま 千坂平通

屏風背に今日の祝賀のモンブラン

喧噪の隙間を縫うて来る聖歌
台詞なき博士の威儀や聖夜劇

池田瑠子

目度度しや金婚式の金屏風

落葉には落葉の矜恃大櫓
木洩れ日はアブストラクト冬紅葉

光琳の描きし屏風青と藍

母の忌や大根洗ふ水の音

風をよぶ大漁旗や牡蠣祭

新井孝磨

越谷 阿部幸代

正装の宮司殿か初詣

凍月や古着巻かるる水道管
寝静まる煉瓦の家並月氷る

泣く風と轟く浪を冬の佐渡

木の葉散る心に新芽出づるころ
海鳴と風と塩鮭夫の郷

茶の花や栄西禪師の茶を含む

加藤でん治

さいたま 野村美子

冬晴や十日つづきてリップ塗る

山際に畑の名残枇杷の花

小春日や肩で息して垣根刈る

霜柱踏めば体内時計打つ
薄造りの河豚を透かして富士と松

鳥居らぬ枯野を行くや昼の月

全島にオリブ実る冬日和
寒月や山城見ゆる宿に着く

通学子の奔めく声や霜柱

冬ぬくし猿の反省手の仕草
出刃研ぐ父荒巻を切る母よ

日溜りの風翻し紅葉散る

夜着を押す妣の手いまも北風の夜
よだれ垂れ唐突に垂れ冬ざるる
空きし席誰かが座り年暮るる
着ぶくれの椅子を動かす極意あり
茶の花や福島なまりも隠し味

さいたま 和田仁八郎

時を知り枯野は色を失ひぬ
行く年を抱きてゆかむ咎めかな
冬夕焼石けりの子の背を押す
荒塩をまとひ白菜しづまりぬ
鳩の巢の大様に日を浴びてをり

川田政代

熟れたるをつまみてあそぶ冬母
母のごとくに居るだけでよし冬母
蒼鷹や狙ひ定めて急降下
家中の暦二重に師走なり
大縄飛び地を離れたる脚十本

小林京子

巡りくる命潜むる枯野かな
よそゆきに袖も通さず年送る
冬みうらメタセコイアは金屏風
夕日落つ枯野にさつと朱を零し
追ひて来る子をだき上ぐや冬みうらら

菅原真理

繋り船を揺らしてをりぬ冬の波
牛市へ荷台の仔牛息白し
満願の御寺に蠟梅香りをり
義士の日や見知らぬ街に降り立ちぬ
祈る背にステンドグラス映ゆる聖夜

伊予 向井章子

石仏の苔むす顔や枯野道
借景の富士に後光や枯野原
陽が陰り色くすみゆく枯野かな
日めくりの金言胸を打つ寒暄
利き酒に五感ふるはず年の暮

さいたま 竹澤和子

綿虫や訃報相次ぐ身のほとり
病む人のか細き声や雪童
雪吊や夫の背中に老いを見る
雪吊の松凜として整ひぬ
二人ともそこそこ元気年送る

若狭 山崎郁子

焼芋の湯気に歓声テイータイム
切干の生まれは日向波の音
生けられて再び賛美の枯芙蓉
銀杏散る花道歩く退職の日
晩秋の黄金の道外苑前

草加 外村紀子

周五郎閉ちて寢際の玉子酒

白菜を割きて半分キムチ漬

葛湯吹く息子の諫め射る

幾段も白鳥憩ふ棚田かな

葛湯吹く吾はひよつとこ君おかめ

伊奈 菅原卓郎

幸祈る香脱ぎ石の枯蟪蛄

そこはかと人前嫌ふ花八手

鷹の眼や懐かしき人ありありと

冬鴟や思はず鍵を確かめり

まつたりとオーボエの音雪の夜

さいたま 綿貫ひさの

赤あかの夕日背に立つ枯木立

見るうちに夕日呑み込む枯木山

旧友の面変り見る年忘れ

集ふ身の暮しさまざまクリスマス

年の暮継ぐ子なき家売りにけり

横浜 山岸弘子

休耕田を咬咬と刺す寒満月

寒月に晒す己の影淡し

反骨の気概や十年日記買ふ

白菜を真二つにする試し斬り

綿虫の離れ際なる独り言

飯田忠男

世の憂さを捨つるが如く障子破る

冬に入る新種コロナの世界地図

伏す床に母の作りし葛湯かな

白鳥来まつすぐ長き着水線

白鳥の留鳥となり沼に住む

春日部 仲田利子

隼や動体視力チャンピオン

鷹の目やビルの谷間の新狩場

初氷真白き富士が呼んで来る

初氷手にする子らの声響く

靴下をつるす楽しみクリスマス

小駒さち子

とろうりと芯に染み入る葛湯かな

風邪引きの佻しさと和む葛湯碗

大白鳥の飛翔の雄姿神宿る

白鳥の生き様あらは水面下

長旅を寄り添ひ癒す小白鳥

諏訪サヨ子

持念仏に心経申し煤払

ねんねこや妹背負ふ隣の子

ねんねこや早反抗期の口答へ

老僧も餅搗きの中たすき掛け

煤払寂聴の法話心解く

若狭 松島寛久

朝露やひとつひとつに光射す
カッブルの夜露にぬれて無口かな
美しき切手の文や雁渡る
かりがねや古き名画のラブシーン
実紫小雨に濡れて色深し

さいたま 後記朝香

この店は昔お白洲河豚を食ふ
朝市や毛糸編みつつ待つ店主
毛糸編む側に三毛猫集まりぬ
イニシャルは赤に決めたり毛糸編む
毛糸編む迷うて解く一目から

東京 飯室夏江

鷹声に強張る気配森の中
漬物の重石の下や初氷
早朝の下拵へや年用意
火事跡の商店街や絆生む
速やかに消防団や小火を消す

岡田宣子

大阪 遠藤人美

月食に沸く道すがら冬ぬくし
そつぽ向く蛸から売れしおでん鍋
ミルクの香濃き舶来のひび菓
寒風に何の何のと胸を張り
拙くも一句を認め賀状書く

浮寝鳥八十路の我もマイペース
落ち葉焚くうすき煙をくぐりけり
枯蔓や千社札貼りお断り
身をゆだねね神苑池の浮寝鳥
風紋に足跡重ね冬の浜

田中泰子

枯るる中大版ストール出番なり
冬枯れの空に音なすヘリ一機
枯れ進むいちやう玉堂美術館
粕汁の熱き大椀持ちあぐね
ファンタジーめくや影絵の古曆

さいたま 鳴海順子

襟巻を真知子巻する朝市女
鎌倉の浜の引締む初時雨
しるこ屋に相傘たたむ時雨坂
喧嘩してとがりし妻に玉子酒
マフラーの妻の相席煙草の香

森美枝子

冬木立雲に届きし鳥の声

鈴木香音子

春近し記憶の中の花ざかり
冬木立日向が広くなりにけり
数へ日やメモを頼りに一日暮る
数へ日や我が手のしわにご褒美を

生かされて米寿越えしや日向ほこ
孫からの花束抱き冬うらら
仏前に米寿を謝する今年酒
冬枯や洪澤邸の奥深し
秩父路に植木屋多し柚子熟るる

杉戸 佐々木史女

墓参りご無沙汰ゆえの枯野道
枯野にも小鳥群れ居る真昼時
釣人を無視して潜る鳩
こつこつと鳴かず飛ばずの鳩
年の瀬に応募が当り利益生む

さいたま 小川洋子

店先の夕日に染まる蕪かな
不揃ひの蕪も並べて無人売
めぐる日や故郷思ふ虎落笛
もがり笛なじみうとうと子の眠る
暗き海の波間に舂虎落笛

さいたま 北出久美子

寂聴尼いづくにおはす冬木立
卒寿てふ師の明け暮れや賀状書く
口紅を仄かにひいて屠蘇祝
晴れ渡るヒユッテを包む冬木立
昭和レトロの髪飾り買ふ年の市

霜多光代

者凝りやゆるりと溶くる箸泣かせ
日の暮れて紅葉の山や蒼と化す
清流や日の温み抱き冬野行く
ひそやかな意志もて咲くや野紺菊
しみじみと唇をめくる極月へ

奥山粉雪

師走の虹孫を抱きて子守歌
クリームのドレスが似合ふ冬苺
粉雪舞ふ天の女神のため息か
もう師走この一年の早きかな
冬いちご乳吸ふ赤子ぷくぷくと

石浜悦子

冬筑波母の手紙の文字乱れ
月冴ゆる帰宅待ちしや大櫂
数へ日や仕事の順は母のまま
寂光や主人の居らぬ冬の庭
冬木立広がる梢に透ける空

岡田芳春

冬木立フレイル進みて紅もなし
冬木立昔のジャージチャック締め
数へ日や杭打ち音にカップ揺れ
数へ日や拍子木微かに針仕事
数へ日やさいころの計六と一

山川 順

冬薔薇一輪門に首もたげ
アクセサリー展青春戻る冬日和
冬の霧幻想的に陽も昇る
寄せ鍋に今日明日明後日色変へる
寒雀節曲げずして夫帰る

和歌山 南條きわゑ

着ぶくれて夜間工事の赤い棒
射的屋の女無愛想着ぶくれて
着ぶくれて爪先立ちの難しく
不本意に男仕掛くる狐鼠
狐火や妖しい人と擦れ違ふ

さいたま 森 和子

初氷見たさに参る寺の池
水底の藻を透かし見る初氷
解けぬ間にさわつてみたい初氷
スカイツリー切り取る車窓冬の旅
裾飾るソーラーパネル冬の山

さいたま 木村るみ子

葉を落としなほ凜として冬木立
初暦まづ記念日を忘れずに
数へ日や思ひ出ばかりよみがへる
数へ日にあれもこれもと悪あがき
小春日や池にかくれし雑魚そろり

川島夕峰

銀杏散る金杏と書くが相応しく
弓弦のしじま切り裂く寒稽古
隊員の吐く息白く長ながと
ビル風に踊りつかれし落葉かな
波の花真横に走る能登岬

川村 治

古くより雅びな響き都鳥
夕茜暗赤の脚みやこ鳥
寄鍋の汁をすすりて母の味
寄鍋を囲む面面睦み合ふ
イベントの人の多き冬の夕

遠西勢津子

報恩講講話死ぬ迄生きる意義
陽の色の木の葉ふんはり庭に積む
漕行けば天より木の葉降り止まず
「馱馬車」の看板師走旧街道
塩鮭を仕込み吊すは夫と義父

宮代 関谷多美子

初霜や鳥が落せし真つ赤な実
河豚ちりの湯気の向かうの泣きつ面
湯冷めして古き友との長電話
刈り込みの垣に残せしお茶の花
初霜を踏みて登校子らの列

湯浅 和

投汁そば膝を交へし冬至かな

さいたま 秋谷風舎

投げ釣りの仕掛け鳴るなり師走空

初氷猪の親子のぬた場かな

山下る風花にこそ押されけれ

河豚刺しの一気一列至福なり
毛糸編み目で物を言ふ時流る
犬の背に編み目かざして毛糸編む
旅の宿思ひがけずの河豚づくし
夜も白みサプライスにと毛糸編む

さいたま 緒方みき子

ゆりかもめ隅田の橋を占拠せり

東京 柳父はる

夕日落つ水尾長くして浮寝鳥

枯芒白銀湛へ華やげり

数へ日のつそり歩く猫二匹

数へ日の彩り増やす街の中

吉川 杉浦理恵

豆腐屋の湯豆腐嫌ひ下戸亭主

湯豆腐や湯気の向かうに父母の笑み

再びの国境閉鎖冬ざる

閉口の兄弟喧嘩木の葉雨

正月を母と過ごせる至福かな

さいたま 山戸美子

東京 畑宮栄子

あの輝きを夫と決めたり寒昂
誰を待つ無人駅前枯芒

公園で木の実捜しの園児の声

ためらひつ五年日記を買ふ傘寿

ポインセチア二鉢飾り膨らむ夢

和歌山 嶋田洋子

さいたま 森下美智枝

必死なる園児の顔や空つ風
城ヶ崎へばりつきたる石路の花
冬座敷居住まひただす若き棋士
歌舞伎座にぎはひ戻り師走かな
ぬくぬくと布団にこもる冬の朝
塩鮭の塩たつぷりと銀光る
木の葉踏み武士も走りし旧街道
神社の庭を黄金に染めて銀杏散る
価千金孫描く遺影冬ざる
年逝くや友の墓石にやつと触れ

初氷練習曲をもう一度

迷ひ込む避暑地のプール初氷

今朝の月写したるごと初氷

放たれし鷹の風圧バードショー

蒼空に一点の鷹なほ高く

さいたま 横山礼子

「お手」できぬ愛犬炬燵転た寝す
電飾の家疏にしメリークリスマス

白足袋の小鉤に宿る冬の月

地に落つる白髪光り木の葉髪

蜜多き長野の林檎ふじ「まいう」

さいたま 古池恵里子

豆挽くや空どこまでも青きこと

サーファーに寄せて引く波冬暖か

祈るごと鋸を引く年木樵

天狼が見詰めているか青き星

山は溶け空に天狼煌々と

東京 山中いちい

夕闇の中へ消え行く冬帽子
金目鯛祝の席の主役張る

隣人の下駄音高し冬帽子

伊豆急や駅毎並ぶ金目鯛

風すさぶ峠の地藏冬帽子

山下ユリ子

腰痛にごろりと過ごす文化の日

マスクして家の周りをランニング

おでん鍋先づは玉子に狙ひつけ

駅に着き老の眼鏡に冬の月

さよろきよると首傾げたる寒鴉

さいたま 水野興二

冬うらら寄り添ふ夫婦今日の無事
寄り添うて冬日貫ひて縁に座す

冬ざれの狭庭に小鳥小枝揺れ

枇杷の花密かに告白してみたく

卒寿余や惜しむ感情年用意

東京 河原叔子

夕焼と空をわけあふ冬の月

ママ友が寄鍋かこみ湯気に酔ふ

寄鍋や箸ふれあふも家族なら

寄鍋や話あつまる夕餉かな

荒川の欄干に「ほら」ゆりかもめ

川口 田村福美

茶の花や乳のほひの赤ん坊
茶の花や白無垢纏ふ嫁御寮

銭湯の雑誌立ち読み湯ざめかな

駄々つ子のふくれつ面やぶぐの腹

初霜の朝日に解けしアスファルト

さいたま 武田重子

マニキュアの色を赤へと初時雨

髪を染め鏡の中の年の晩

片耳にマスクぶら下げ年歩む

赤ワイン切り子ガラスに雪まつり

冬服の皺は亡き夫日々が棲む

年の暮そろばん箸置即買へり

晦日そば算盤箸置初づかひ

「無事」の軸かけてゆつくり柚子の風呂

虎落笛友の余命を知る電話

木枯の誘ひにのりて友逝けり

店先に目の黒黒と金目鯛

金目鯛一尾捌きてもらひけり

金目鯛を煮付け夕餉に夫を待つ

金目鯛の煮付け黙黙食ぶる夫

無造作にテーブルに置く冬帽子

何も無き空を突き刺す冬木立

冬晴るるお宮参りの緋の産着

にこり湯に浮かぶ黄色の冬至の香

シャッターを下ろした店や冴ゆる月

さいたま 安藤みえこ

藤 沢 小島喜代子

さいたま 高原和子

橋爪さなえ

第六波の抱きし不安年の暮

いとほしむ残る一葉冬紅葉

針供養入れてもらへぬ注射針

極月や順番まちの火葬場

藤の実の大ききはじけ足もとに

猫だいて一人暮しの霜夜かな

早朝の白南天の輝けり

太陽とにらめつこしてふきのたう

朝の空堂々と鷹弧を描く

雄々とハンターの鷹鳩の羽

初氷モザイク柄のワンピース

早朝にビシビシと割る初氷

是非もなし喧嘩の罰は障子張り

明け暗れの丸き寒月与野の町

セピア色の狭庭に赤き冬薔薇

抱きしめてやりたい君の湯冷め顔

朝のもや白手袋に竹ぼうき

子の見入る聖樹にパンダ上野駅

聖樹の灯足をとどむる帰り道

和菓子屋の隅に小さな聖樹かな

和歌山 高橋満耶子

鬼 石 加藤ナヲ子

さいたま 樋口元美

鈴木藻好

鈴木敦子

数へ日や狭き廊下に手摺垢

草加 持永喜夫

数へ日も明日さへ見えず生きる日々
身すがらに捨てるものなし冬木立
数へ日や手向けの花も一つ増え

背のびしてただおほらかに蝌蚪生る
春水の水から生まれ水となり
待ちぬればきつとあへると蜃気楼

所沢 関根千恵

すつびんの美しき女やゐのこづち
林檎四切れつづ母子の幸せ

さいたま 吉川拓真

あかぎれの父親の球受け止める
木の実落つ二歳児よ行きたきとこへ

夜な夜なに足音忍び雌狐は
着ぶくれて反骨かくれ胸を張る
着ぶくれて三回ワクチン思案中

さいたま 落合和枝

歳の市先づ年金日待ちてより

東京 水落守伊

年金に見合ふ物など歳の市

歳の市書き留めしメモ見当らず

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

小田原の蒲鉾求め歳の市

さいたま 福田育子

年の瀬やかしわ手ひびく宮の杜
軽やかなステップ踏むや年の暮
へボ将棋もう一局の湯ざめかな

初氷バケツに張りし皮膚のごと

糸井キヌエ

鷹狩や生業となすキルギス人
拳あげキルギス人は鷹放つ

通信添削指導のご案内

【指導者】

網野月を

【作品】

5句 【受講料】 1,000円

【方法】

- ① 用紙自由
- ② 住所・氏名・電話番号を明記
- ③ 84円切手を同封
- ④ 返信用封筒は不要
- ⑤ 締切なしで随時受付

【送付先】

網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

作品評

山本鬼之介

地母神の深き眠りや大枯野 西幅公子

地母神は、母なる大地の神で、多産と豊饒を象徴する女神である。辞書に解説されている。地母神の起源については、世界各地で、また、宗教上の見地からいろいろの説がある。うだが、我が国においては、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冉尊（いざなみのみこと）にそれを関連づけているようだ。即ち、伊弉冉尊を地母神とする説である。何れにせよ、あまり専門的なことを考えずにこの神様を辞書どおりに解釈すれば、荒涼とした大枯野がほんのりと温んでくる。春から秋のシーズンをフル活動し、来るべき春に向けて体力を付けるためにぐっすりと眠っている地母神なのである。「地母神」という言葉を見つけた作者の向学心を評価する一句である。

仲人の粋な都々逸金屏風 染谷正信

仲人と金屏風から察して、結婚披露宴の一齣かと思う。昔

なら邸宅か料亭の大広間がその舞台であろうが、現代ではホテルの宴会場であろう。主賓を筆頭に主立った来賓の祝辞が済み、花嫁の色直しの後のキーカットへと進行する。頃は佳し、司会者の進行で余興タイムとなり、仲人が指名された老舗の大旦那であろうか、金屏風を背にして日頃嗜んでいる都々逸を即興の寿（ことほぎ）の歌詞で唄うと、やんややんやの喝采の声が上がった。新郎新婦の頬が一段と輝いている。

おほつびらに軋む江ノ電冬めける 曲淵徹雄

「江ノ電」は、小田急電鉄の完全子会社で藤沢に本社がある江ノ島電鉄の略称で、藤沢〜江ノ島10kmの間に15もの駅がある。沿線の中にはかなりの急カーブがあつて線路の軋む音が鳴り響き、鎌倉の住宅地を縫って走る電車に木の葉が触れたり、垣根に咲いている花に手が届きそうな場所があつたりするので、臨場感に溢れた路線の魅力に惹かれ鎌倉や江ノ島を観光する多くの人に利用されている。沢山のの人に愛されている江ノ電の特徴を、「おおつびらに」が実に率直にしかも温かく表現している。

白鳥や暮色の影にこぼれ入る 新 暦文

白鳥の中でも特に大白鳥は、身近で観察できる鳥の中ではかなり大型であり、日中の明るさの中では眼に確りと焼き付

く存在である。ところが、陽が西に傾き、湖水や沼に夜の帳が近づくと、その存在が隠されてしまう。その時間の一瞬を上手く表現した俳句であると思う。

冬木蔭理科室にある人体図 反町 修

掲句は「理科教室の」にしても定型句になるのだが、作者としては、「にある」の三文字に拘ったのだと思う。というのは、作者が小中学校の頃に、理科教室に常備されていた人体図や人体模型に、気味悪く思いながらも興味を抱いていて、その当時の想い出を現在に定着させたいが為の表現手段であると理解した。

校庭の木の枝の影が理科教室に伸びていて壁に掛けてある人体図に届いている。そして、その影自体も人体図の様に複雑な形状を呈しているのである。

鯨詰めの出雲の宿舎神の旅 保坂翔太

神様にも何段階かの階級があるのだろうか。神の旅で出雲へ赴いた神様達の宿舎を題材にした本句に思わず膝を打った。

実に面白い。最上級の神様は貴賓室、上級の神様は一人部屋、中級の神様は二人部屋、以下三人部屋から地方のその他大勢の神様は大部屋に雑魚寝の待遇なのだろう。江戸時代に、路銀の乏しい庶民が旅先で相部屋の扱いを受けたことを、出雲

へ出張の神々に当てはめたことが実に愉快である。

昼月を背にして走る 枯野道 笹本啓子

昼月は存在感が薄いですが、眼に入ると何故か嬉しくなる。夜の月は神々しく、まさに遠い存在であるが、昼月には、何か困りごとがあれば相談に乗ってくれるような親近感が抱ける。さて、「昼月を背にして」と「枯野道」は判るが、「走る」が如何なる目的によるものが不明で、それを読み手に色々想像させるための隠し味なのであろう。

薄色のニンフの棲まふ冬木立 元田亮一

薄色のニンフの「薄色」に、作者の思いと鍵があるように思える。それは、冬という季節感に対する調和的なものではなく、冬木立に相応しい目立たぬ色合いの衣を着たニンフという意味かと思う。その側を通る自分に呼びかけて欲しいと思う雰囲気ごとく漂っている。

寒紅やグラスの縁をなぞる指 檜鼻ことは

季語「寒紅」は、むかし紅花を材料として寒中に作られた紅のことを言ったが、現代では寒中に差す口紅のことと解してよからう。

とあるクラシクなバーの止り木に座してグラスを傾けて

いる三十歳代と思しき女性客。グラスの縁に着く紅が気になるのか、それとも隣の男性客の気を引こうとしているのか、どことなく意味ありげな女の仕種である。さてさてことの顛末や如何に……。

化学式語んじてみる河豚の毒 原田秀子

高名であった歌舞伎役者の八代目坂東三津五郎丈が、好物であった虎河豚の肝を食して急死したのが昭和50年で、以来河豚の取り扱い強化や一般人への注意喚起の徹底などによって、河豚に対する感心が高まったことを記憶している。

河豚毒Ⅱテトロドトキシシン(TTK)は、何と青酸カリの千倍以上の毒性を有しているそうで、河豚の肝臓や卵巣などの内臓にあり、食すると全身に麻痺が進行し、24時間以内に死亡に至るそうで、改めてその怖さを識った。

河豚毒の化学式を語んじたという作者の知識欲に敬服した。

ほとほと夫がそば打つ年の暮 神田治江

辞書によると、「ほとほと」は「戸をたたく音」と解説されているので、掲句の場合は、蕎麦打ちの最終段階であろう蕎麦切りの包丁の音だと思ふ。蕎麦打ちに集中する夫に目を配りつつ年の瀬の家事に勤しむ妻の姿もまた佳きかなであるが、仕上がった手打蕎麦で年越しをするこの夫婦に、来る年

も幸多かれとエールを贈りたくなる俳句である。

準備整ふ干支の置物年の暮 越田栄子

玄関や床の間、自分の文机など、大小幾つかの干支の寅の置物が用意され、後は出番を待つだけとなったのである。旅行や催し物などと同じように、準備する段階が愉しく、選り抜きの置物を揃える喜びは格別であったと思う。

ビル案内のロボット走る年の暮 丸屋詠子

近年世間の各分野におけるロボットの進化と活動範囲の拡大には、目を見張るばかりと言えよう。掃除ロボットや介護ロボットなどと同じように、このロボットも案内嬢に代わって年末で人の出入りの多いビルの案内を熟しているのであろう。「ロボット走る」から、その活躍の実景と作者の驚きの表情が伝わってくる。

元朝や金の箔押し夫婦箸 梅澤輝翠

想像するに、結婚記念日の祝品として贈られた夫婦箸であろうか。もしかすると、何年か大事に仕舞い込んであったものかもしれない。元日の朝の膳に置かれた夫婦箸を見ると、何時になく改まった気持になる。何と言っても金の模様の箔押しが高級感と重厚感を兼ね備えている。忘れかけていた夫

婦の信頼感を取り戻した二人なのである。

お宮の松に女かしまし冬日和 橋本京子

「お宮の松」は、明治時代の文豪・尾崎紅葉の新聞小説である「金色夜叉」に登場の間貫一と鳴澤宮の別れの場となった松で、今あるのは、昭和41年に植え替えられた二代目の松で、熱海市東海岸町の国道135号線の脇にある。熱海温泉へ出かけた年配の女性グループが、お宮の松をバックに記念写真を撮り、冬の陽射しを浴びながら一頻りお喋りに華を咲かせたのであろう。

鮫鯨や縄文の世の面構へ 横山君夫

縄文人は、現代の人間とは全く異なる食生活をしてきたであろうから、顎を中心とした顔の骨格が頑丈で、男女ともかなり厳つい顔貌であったと思う。本句のように鮫鯨に譬えられては酷かと思うが、案外言い得て妙なのかも知れない。

冬の月何故か反省うながさる 山岸久美子

寒空に皓皓と輝く冬の月。月を仰ぎ見ている内に、他人には言えない悩み事を聞いてもらいたいような気持ちになってきたが、月はそんな甘ったれた人の心を戒めるように、厳然とした光を放っている。冬の月のイメージを、我が身を媒体に

して表している謙虚さに惹かれるものがある。

漆喰壁にその影落とし冬の蝶 洪谷きいち

土蔵の白壁であろう。今にも地に落下しそうな弱々しい冬の蝶である。映画のスクリーンの様な漆喰壁に影を宿した冬蝶は、大海原に展開した米国艦を目がけて突っ込んだ特攻機の様でもあったのではなからうか。

晴れの日の娘の門出金屏風 村杉清吉

結婚披露宴の金屏風を背に、神妙にしている娘の姿を離れた席から見つめている父親である。晴れの日の娘の門出を心の中で祝福しているながらも、一方で淋しさがこみ上げてきて、目頭が滲んでくる。筆者もその経験者の一人である。

アフリカへ続く冬空キリン舐む 本橋稀香

アフリカの草原で生まれたキリンが、動物園の高木の葉を食べている。その恰好が、空を舐めているかの様に見える。その空は、生まれ故郷のアフリカへ続いているのだ。

日向ぼこ窓際族の猫二匹 清水桂子

サラリーマンではなく、猫を窓際族にしたことで此の上ない傑作が生まれた。二匹が実に効果的である。

水琴窟

(水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

林檎売り語尾に故郷の訛有り

菅原卓郎

「りんごーりんごーりんごー」などと大きな声で町内に回ってきた「林檎売り」。林檎といえは青森か、あるいは長野か。その語り口はたしかに故郷の言葉なのだ。飾らぬ訛がたまらなくなつかしい。座五を「国訛」としてはいかがか。

初紅葉沼に仄かな彩散らす

斎藤みよ

名もない沼であつても初紅葉の岸に飾られたら、まちがいになく名勝地となる。うつすらと色づいた木々を発見した悦びと落ち着いた時間、空間を満喫している。「彩散らす」には、静かな水面に置くように、また、風で乱れるとも解釈できる。

石庭の箒目清し秋の朝

外村紀子

枯山水で有名な京都龍安寺の石庭。水を使わず石組みを主として山水を表現する様式だ。砂礫に箒目の水面を作りだす。その風格に言葉を失うほど。心が洗われる。その清しさと、凜とした「秋の朝」の感覚に通じるものがある。

廃線に抗ふ如く明治草

水落守伊

「明治草」は「ヒメムカシヨモギ」で「鉄道草」の名をもつ。明治時代に帰化したキク科の植物である。廃線路の荒れた日向に逞しく生える草。「明治草」の名に魅せられた。

胡桃落つピンと立ちたる犬の耳

榊原聰子

落葉高木の胡桃は晩秋のころ、その実を落とす。固い核のある実は落ちて音をたてる。その音を敏感に聴き取っている犬の泰然とした態度。静かな里の一日がみごとに描きだされている。犬の耳の動きに注目した観察力を称えたい。

秋雲に紙飛行機の大旋回

武田重子

学童のころ、さかんに紙飛行機を作つて飛ばしていた。右のバランス次第で直進したり旋回するなど、自在に操れるのも楽しみであった。悠々と空に舞い上がる紙飛行機。秋の空に「大旋回」が相応しい。雲の高さまで飛んでいくようだ。

手をつなぐ子等は仰ぎて秋の虹

霜多光代

たくさんの子等が秋の虹を見ている場面を思い浮かべる。虹を見るのは稀であり、見えたときは嬉しいものだ。半円の虹の橋をまねて子等は手をつなぎ合っているのだろう。時の流れに従うと「秋の虹子等は仰ぎて手をつなぐ」であろう。

地平線の果ての明るさ落穂拾ふ

鈴木玲子

フランスの画家「ミレー」の『落穂拾い』を思い浮かべる。農民生活を主題とし深い宗教心をもって、働く人を描いたミレー。関東平野の広大な平地。「地平線の果ての明るさ」から、夕刻の景であろう。労働の充実感と希望が感じられる。

峰めがけ鎌の如く雁わたる

秋谷風舎

雁は秋に北方から渡来し、湖沼などで越冬する冬鳥。毎年来てゐるのだから。目標としている峰をめがけて一直線に飛んで来た。十羽くらいで群をなし、その形を棹や曲尺にたとえられる。「鎌の如く」の形容が雁の逸る心を察している。

太陽の光の中の稲穂かな

加藤ナヲ子

「太陽の光の中の」の措辞がいい。「稲穂」を表わす語はほかに「稲田、稲の秋、稲筵、稲の波」などがあるが、太陽の光を燦々と浴びて黄金色に波うつ様を「稲穂かな」と実直に詠嘆したところに稔りの喜び、感動が表現されている。

抜けし歯を屋根に放る子鯛雲

森 和子

以前は、乳歯が抜けると、上の歯は縁の下へ、下の歯は屋根へ放ったものだ。「鯛雲」の「鯛」と歯の主成分のカルシウムとの結びつきを思わせる楽しい句である。

湯浴みして薄紙のごと月のあり

小山敦子

昼の月は青い空に融け込んでいて薄くて見えない。上弦の月以前であろう。日暮前の空にうつすらと浮かんでいる。明るいうちから風呂をいただきたいという幸せ、日常の充実感を垣間見た気がする。「薄紙のごと昼の月」と明確にしたい。

十三夜眠る赤子の乳の満つ

橋爪さなえ

「十三夜」は陰暦九月十三日夜の月で「後の月」とも言われる。肌寒さを覚えるころとなり、赤子も日に日に育ってきた。「眠る赤子の乳の満つ」の描写が乳児の純粹な顔、丸々とした体型をもの語っていて、十三夜にふさわしい。

テーブルに柿渋を塗る深き秋

駒崎里美

「柿渋」は渋柿の実をしぼってとった液で、防腐剤として紙・木・布などに塗る。塗料の代わりにもなる。近年は柿渋を作ることも使用することも珍しくなった。古き時代の智慧、伝統の技を重んじつつ深まる秋の感慨に耽っている。

物干しを占領したる吊し柿

緒方みき子

柿は元来、渋柿が主であった。皮をむいて日に干すと甘くなる。都会でも柿の木のある家が少なくなない。干し柿を作り、それを軒ではなく、物干し場が最適なのだ。うらやましい。

網野月を選

山紫集

老鷹のみじかく啼きて沼の暮

日高道を

この星の未来見ゆるや鷹に問ふ

青木鶴城

熊鷹の琵琶湖の森に来しとかや

宇田白鷺

大鷹の舞ふや眇を畏れつつ

正木萬蝶

蒼天を飛礫のごとく刺羽翔ぶ

松井由紀子

仲見世を巾着切りは鷹の眼で

井口俊晴

鷹潜む森に誘ふ黒眼帯

石田慶子

鷹の羽根拾ひて嬉し炭手前

梅澤佐江

鷹の目や魔女は竈に火を熾し

内田恵子

魚河岸に四代目あり鷹の舞ふ

梅澤輝翠

蒼鷹よ汝は税吏の面構へ

染谷正信

北の原野梢の鷹の吹かれづめ

西幅公子

鷹舞ふや災害跡を癒すかに

——以上特選

鷹匠の爪の食ひ込む左腕

高島寛治

田畑の上大鷹の大飛翔

高橋満耶子

檻の鷹狩ることさへも忘れけり

武田重子

檻の鷹狩ることさへも忘れけり

田中章嘉

隼や悲劇生まれる急降下

鳥羽和風

孤高の鷹むんずと獲物掴み翔つ

町野広子

鷹舞ふや見覚めて朝の有頂天

飛永 鼓

良弁の杉と知りてか鷹の舞ふ

丸山マスマ

悠然と頭上をよぎる鷹の影

外村紀子

鷹舞ふや毘沙門堂に隙はなし

宮崎紫水

大鷹となりて羽ばたけ子の未来

南條きわゑ

獲物捉へ傾ぐ隼過疎の宙

宮崎チアキ

鷹旋回す山の方便を垣間見て

野田静香

鷹一羽青天舞ひて睥睨す

村杉清吉

隼や獲物見つけて急降下

野村美子

併走の鷹の眼険し利根渡る

本橋稀香

猛き鷹パラグライダー躲し飛ぶ

原田秀子

大鷹の凝視の先の動くもの

森 和子

右に左に鷹の舞見ているは坂

福田千春

大鷹の山肌に舞ふ旅日和

森川義子

鷹老いて孤高の目差霊峰へ

藤澤喜久

海に出て宙に舞ふ鷹見つたり

森下美智枝

鷹匠は襟を正して鷹放つ

古池恵里子

熊鷹の金切り声や天を裂く

森本早苗

ゆうゆうと制空権を統べる鷹

保坂翔太

天に鷹地に男あり意志の花

山田美佐尾

暮れ方の沼を両断鷹は巢へ

曲淵徹雄

窓揺らし鷹飛び立てり広瀬川

山中いちい

鷹の目の威厳に惚れて動けずに

湯浅 和

上空を三度旋回鷹渡る

井関 礼子

何か追ふ野を擦るやうに鷹一羽

横山 君夫

鷹舞ふや大旋回の空の張り

井上 燈女

大鷹や蒼天に描く無限大

横山 礼子

惚れ惚れと鷹舞ふ勇姿富士裾野

井上 玲子

我が物と知床の空鷹は舞ふ

綿貫ひさの

鷹の巣と聞けど姿は見当らず

上戸 千津子

大鷹の見据へる天下関ヶ原

新 曆文

少年の指さす鷹のかうがうし

大塚 茂子

老松に隼の鳴く観音堂

阿部 幸代

自由なり飛翔の鷹の一文宇

大場 順子

隼の射るが炯眼魔の如し

安倍 弘夫

富士山を背後に一点鷹の舞ふ

岡田 宣子

大鷹は死して矢羽よ的を射る

新井 孝磨

落し来る鷹にこぼるる松葉かな

岡野 順子

一徹なをとこの眉目鷹放つ

荒井 俱子

吾の孤独上枝の鷹に見すかされ

加藤 でん治

大鷹の真つ逆さまに叢に落つ

飯田 忠男

鷹の腹夕べは軽く今朝重し

川島 典虎

鷹の眼の望遠レンズ自在なり

池田 雅夫

襖絵の鷹飛ぶ座敷旧家かな

河原 叔子

昼の月捉へむとして鷹舞へり

石川 理恵

青空へ我独尊と鷹たけり

神田 治江

鷗へと風切る鷹の翼かな

木村るみ子

爆音に仰ぐ機影や鷹の空

下川光子

貫主書く「金」の一文字鷹の舞ふ

熊倉千重子

鷹が舞ふ八溝山中札所かな

菅原卓郎

鷹静止空を食み出し急降下

河野はるみ

鷹高く箱庭のごと町を見む

菅原真理

鷹の目や大きな森が映りけり

小駒さち子

若鷹や翔びゆく空のまばゆさよ

杉浦理恵

鷹の目の執刀を待つメスのごと

越田栄子

里人のやさしまなざし鷹の巢へ

鈴木和子

網越しの鋭き鷹の目に脅え

後藤綾子

若鷹や一気呵成の竜王位

鈴木藻好

鳩の群を摩天楼より襲ふ鷹

近藤徹平

カラスらに追はれ孤高の鷹哀れ

諏訪サヨ子

大鷹の眼下渦巻く最上川

斎藤みよ

海峡の丘の十字碑鷹渡る

関谷多美子

渡良瀬に鷹の舞ひ翔つ日和かな

佐々木典子

鷹一羽都市の鴉に追はれけり

瀬戸雄二郎

大鷹や空一点の雲もなし

笹本啓子

大鷹や大見得を切る団十郎

反町 修

優雅なり天空かけて鷹の舞ふ

佐藤克之

☆

☆

鷹ホバリング旅人消ゆる親不知

渋谷きいち

山紫集作品評

網野月を

老鷹のみじかく啼きて沼の暮 日高道を

なぜ「老」とわかるのか。つまりそれは、その啼き方なのである。作者はそれを聞き分けられるのだ。この断定が句の生命線である。

座五を「沼暮れる」としなかったところに動詞「啼く」を活かす技術があった。つまり中七の接続助詞「……て」に拠って「沼暮れる」が導き出されるとすれば、「啼き」と「暮れる」が接続助詞の効力で繋がる訳であり、詩としての有り様を超えて散文的文脈になっていたところである。座五の体言止めが絶妙の効果をもたらしている。

この星の未来見ゆるや鷹に問ふ 青木鶴城

「見ゆるや」は自動詞であり、「未来」が主語である。その様子を作者は「鷹」に問いかけているという構成である。一見、複雑な構成に思えるのは、主語が転換しているからなのだ。中七の「……や」の切れ字によって句を二つの文節に二

分割して、「未来」の一文と「鷹」の一文にしていると解釈すれば、切れの配置と言い、複雑な構文と言い、巧みに取り合わされている、と読むことが出来る。

「鷹」が「未来」を見ていることには変わりないのだが、「未来を見るや」と「未来見ゆるや」では格段の差があるとういものである。

熊鷹の琵琶湖の森に来しとかや 宇田白鷺

作者は若狭の住人である。湖北は熟知しているのであるから、庭のようなものなのだ。その作者からしてみても、半疑問形での「熊鷹」の安否なのである。座五の「来しとかや」の措辞は作句の手練れの証である。もし「熊鷹」が来ていたらどうしたというのだろう。やはり鷺は鷹に遠慮するものなのであろうか。

大鷹の舞ふや眇を畏れつつ 正木萬蝶

作者なのか？それはないから作者が見ている誰かなのだろう。そもそも「大鷹」自身が「眇」ということなのかも知れない。とにかく「眇」は癖の強さを連想させる。邪悪なら曲者であろうし、正義なら歴戦の勇士ということである。「大鷹」ほどのものが「畏れ」るのであるから、鷹匠頭かなにかであろう。句中の語彙が方向性を揃えていて、纏まり感のある句に仕上がっている。

蒼天を飛礫のごとく刺羽翔ぶ 松井由紀子

座五の季語「刺羽」は「差羽」とも表記する。小鷹のことである。本来は秋の動物に分類されている季語である。「飛礫のごとく」飛翔する小鷹は、勇壮なものである。もろがえり(蒼鷹)などよりも飛翔は疾く文字通り「飛礫」のように作者には見えたのであろう。

仲見世を巾着切りは鷹の眼で 井口俊晴

「鷹」と言えば、その第一印象は目の存在感である。獲物を見定める「眼」は猛禽のそれであろう。もしかしたら「鳶」くらいでもいいのかも知れないが、「鳶」では季語になりませんね。

鷹 潜む森に誘ふ黒眼帯 石田慶子

「黒眼帯」とは一体誰のことなのか、作者自身のことなのか、それとも他の誰かのことなのかも知らない。句からの情報はこちらで途切れている。では「黒眼帯」は何のシンボルなのであろう。その解釈によって読者の解釈が異なるところである。筆者には、この句が人道批判的な内容を含んでいるように読めるのである。「鷹」の餌食になれということなのだろうと深読みしてしまう。

鷹の羽根拾ひて嬉し炭手前 梅澤佐江

「鷹の羽根」を「拾」うことは、茶事に臨んでの縁起担ぎなのであろうか。それとも光悦の鷹ヶ峰へでも連想を飛ばせばいいのであろうか。普通俳句では「嬉し」という直接的な感情表現は嫌われるのであるが、「鷹の羽根」を「拾」うことと茶事が適当に離れている内容なので、「嬉し」で程よく繋がられているのである。ただひたすらに個人的感傷を作者自身から突き放して表現しているのである。

鷹の目や魔女は竈に火を熾し 内田恵子

グリム童話であろうか。上五の「鷹の目」は獲物を狙う目であり、魔女の眼差しなのである。焰を見るときの眼つきは誰でも一種の妖しさを秘めているものである。ファンパーティングのメロデーが聞こえてくるようである。

魚河岸に四代目あり鷹の舞ふ 梅澤輝翠

断定的な措辞の構成である。情報は限られていて、何代も続いた「魚河岸」の老舗と、魚河岸を俯瞰する「鷹」の存在だけが叙されている。その二つの要素を繋ぐ他の部分は読者の想像に任されている。作者には作句の起点となった景や事実があるのであろうが、解釈を任された読者は自由に物語を紡いで良いのである。筆者は「鷹」に象徴される天国との関係性を背景に、移転した豊洲において新たな店舗を父祖三代が見守っていてくれている、と解した。

大村節代 選

鼓
笛
集

小春日や月命日の花鋏
雨降るやされど鞍馬の冬桜
ほどほどに数へて手酌除夜の鐘

檜鼻ことは

紙めんこ勝つ子負くる子水つ洩
肩窄め熱爛二本ガード下
寒の水嚼んで海馬を目醒めさせ

染谷正信

明星が寒の朝日を引きあぐる
春まぢか白菜固く巻かれをり
東雲に消ゆる寒灯また一つ

飯田忠男

ちよんぼりと枯葉のやうに寒雀
初雪や街はほんわり夜に浮く
イヤホンの乙女笑みゆく冬並木
歌合戦の合間に食ぶる晦日蕎麦
寒の入川面に残る白き水脈
風花や青空透かせ吾の胸に

杉浦理恵

節料理煮物の材は季語ならず
新しき寝間着の嬉し大晦日
ひとり居の遠くに近くに除夜の鐘

山中いちい

榾火して叩くラジオの真空管
雪解やへそくり婆が靴を買ふ
妻の胼胝嫁の鱗とも日日暮らす
擦り抜ける師走の街をバイク便
膝頭並ぶ足湯の淑気かな
山風を健気に耐へる冬桜

松島寛久

岡田宣子

まぶしさはいちやう落葉や試歩の庭
愛犬とより添ふ縁の日向ほこ

夫守る冬の鉢物いきいきと

去年今年家族で祝ふ北の国
福袋新しき窓開くなり

読初や第三句集は萌木色

初電話姉の活力貰ひけり

寝ころびて昭和の匂ひ畳替

冬北斗築百年に在る作家

初春や子供囃子の聞こえくる

青饅の漸く母の味なりき

ゆつくりと病軀の母と青き踏む

看護婦の賀状うす紅たれかれに

涸溪をころがり落つる吾が餅

寒月や大枝揺るる影窓に

初夢や宇宙旅行の月の石

天井の高き蕎麦屋の松飾

もこもこの双子パンダのお年玉

榊原聰子

小駒さち子

鈴木玲子

森 和子

山岸弘子

樋口元美

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

2022年3月号

特集
俳句は境涯の詩
境涯俳句を読む

○論考「境涯俳句とは何か 秋尾 敏」
○境涯俳句 時代別セレクション
岩岡中正 角谷昌子 高柳克弘
○それぞれの境涯
富田木歩：福永法弘 村上鬼城：加古宗也
石田波郷：鈴木しげを 野澤節子：松浦加古
折笠美秋：大井恒行 村越化石：外山一機
○私の「境涯」を詠む「句自解」
山崎十生 鈴木節子 中村雅樹 岩淵喜代子

特別作品21句
朝妻 力

クラビエ 俳句界NOW かしまゆう

特集 私の追求したい季語
安部元氣 中西夕紀 小川軽舟
篠塚雅世 黒澤麻生子 中本真人

北斗賞歴代受賞者競詠
発表！ 山本健吉評論賞

*セレクション結社 「篠」辻村麻乃

私の一冊
如月真菜「童子」

対談
佐高信の甘口で「コンニチハ！」
芳永克彦（井藤 正）

「俳句界」投稿欄
一流選者14名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森 | お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

鼓笛集作品評

大村節代

ほどほどに数へて手酌除夜の鐘

檜鼻ことは

大晦日から元日にかけて、各寺院で人間の百八の煩惱を消滅させるように、百八回鐘を撞く。煩惱には諸説があるようだが、百七回は旧年中に撞き、残り一回は新年に撞くという。作者は年越しの夜、一杯やりながら、百八も煩惱なんか無いよと一人言を言い乍ら、時々、数えたり、一杯やったりと何ともうらやましい。美酒ですね。

肩窄め熱爛二本ガード下

染谷正信

また日本酒の句、冬はやはり日本酒が良い。この句は「ガード下」で、一気に情景が浮ぶ。仕事帰りのサラリーマンが屯す新橋駅のガード下はつとに有名だ。しかし、何処のガード下でも、上五の肩窄めの措辞により、一日仕事をし、熱爛でほっと一息つく様が浮ぶ。コロナが終息し、ガード下で屯す

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解）

本橋稀香

肌着にも記名の父よ枯野道

父は卓球が生きがいの元気な人でした。

脳梗塞で右半身が不自由な身体になってもリハビリだからと言いつ張って杖をついて買物に行つてしまう人でした。

寒い日に、父が買物から戻らないと言われ自転車を探し廻りましたが見つからず、もう警察に通報しようと思いつきながら帰ると、ちゃっかり母と炬燵でお茶をしていた事もありました。そんな父を思い出して句にしました。

日常が早く戻ります様に。

東雲に消ゆる寒灯また一つ

飯田忠男

東の空がわずかに明るくなる夜明、次第に明るくなり、家の灯が一つずつ消えていく。冬の長い夜が白々と消えて、東の空に浮かぶ雲もはつきりと見えてきた、一日が始まる。

水明例会

第一例会（浦和）

福引や子の引き当てしこもかぶり
 初旅や「出発進行」一輛車
 福引や降るやうに鳴る一等賞
 進水のごとき覚悟や新成人
 初風や進水式の楽高し
 初弾や行進曲を勇ましく
 八十路なほ進取の気概今朝の春
 顔見世は安宅の関の勤進帳
 福引や忍び笑ひを得として
 福引に強き子つれてガラガラドン
 福引に景気呼び込む商店街
 莊厳な寄進の櫛や初詣
 初風のひかりを進む走者かな
 ウイルスの素早き進化する陣

境 延昭
 茂木 和子 報

由紀子
 治子
 順子
 理恵
 延昭
 以上特選
 節代
 光弥
 和葉
 稀香
 理恵
 順子
 徹平

第二例会（東京本所）

今年こそ躍進誓ふ初句会
 敵かに進む笙の音年新た
 安穩てふ福引当てし余生かな
 初夢や進退きはみ声発す
 初詣長者寄進の大提灯
 福引仕切る商店街のおかみさん
 山中みどり
 太田絹映 報
 煤払ひ脚立から見るわが住処
 待春や江ノ電で行くひとり旅
 引つ込みのつかぬアドリブ初芝居
 1、2、3あいうえお書け春を待つ
 春を待つ銀のフルートに跳ぬる指
 源氏豆諸行無常の春を待つ
 去年今年寝付かれぬ間に羊増え
 糸付きの白歯屋根へと春を待つ
 喜恵
 チアキ
 由紀子
 治子
 マスミ
 延昭
 敏江
 鶴城
 敏江
 鶴城
 以上特選
 竺仙
 敏江
 鶴城

山中みどり
 太田絹映 報

第三例会・若松例会（東京）

肩先の冷えに目覚めり春を待つ
 凜と立つメタセコイアの冬木かな
 待春や丸まる猫を抱き居る
 音も無しただ初富士にひかれゆく
 待春や黄蘭の蕾ほころびて
 立ち上る背に貸す手や春隣
 一年生の髪の寝ぐせや寒き朝
 五明
 正木 萬 昇 報
 寒卵店主猫背の定食屋
 お初釜慣れし岸駒の虎恐し
 寒卵予感びたりと黄身二つ
 大仰に啼いてみせたる初鴉
 氣負ひなく白磁を飾る初曆
 曜変天目表紙を飾る初曆
 日向ほこ此処が地球のどまん中
 寒卵地産の飯の炊き心地
 いちい
 峰雄
 玲子
 士史
 サカエ
 みどり
 絹映
 慶子
 ひろこ
 康世
 徹雄
 倭子
 マスミ
 萬蝶
 昇



——以上特選

片方は立派なカラザ寒玉子
初日射す一矢を待てる白き
新聞紙静かにくるむ寒卵

大場順子
月を

母鷄に抱かれる事なし寒卵

慶子

寒卵こだはり強き父の性

紀子

うしろ手に締むる網の戸寒卵

鶴城

天仰ぎ農夫一氣に寒卵

岡野順子

寒卵難なく百寿越えぬたり

雅夫

産みたてと添へ書きのあり寒卵

康世

寒卵二つならべりや外方向き

はるみ

寒卵「芭」の字ワープロ登録す

ひろこ

屠蘇の味慣れてしまへば甘露かな

俊晴

慣習の夫の一言屠蘇祝ふ

マスマ

今すこし生きてみやうか寒卵

徹雄

茜さす日に透く命寒卵

佐江

転職の子に寒卵今度こそ

理恵

わが気魂一氣に飲み込む寒卵

倭子

良禽の嘴まろし寒卵

萬蝶

旅そぞろ外湯に茹づる寒卵

昇

第四例会 (浦和)

境延昭報
石井喜恵

まづ晴と記してペン置く初日記

寛治

補陀落の海見ゆ岸の寒椿

光弥

初釜や両手に余る寒茶碗

光子

初富士に簪のごとく雲のあり

恵子

寒椿落ちし谷間の水はしる

順子

富士は確と雲の棚引く初茜

でん治

初硯八十路の胸の「夢」一字

延昭

厨より背伸びして見る初日の出

喜恵

初筑波けん玉の音リズムカル

恵子

落ちてなほ苔に耀ふ寒椿

昇

病棟より望む遠山初茜

でん治

初声や朝日に浴し太極拳

修

艶福の夢は吉兆初茜

延昭

落ちてなほ蕊のはなやぐ寒椿

由紀子

初日の出昭和平成令和生く

翔太

初御空指呼に立つ富士神さぶる

玲子

残り月光背として寒椿

光弥

女人埴輪の尻でつぶりと寒椿

マスマ

小三治の長きまくらや初天神

曆文

初写真いつも目を閉つ次男坊

寛治

母と子で亭主と客の初点前

光子

くれなるは人恋ふ色や寒椿

喜恵

第五例会 (浦和)

梅澤佐江報
河野はるみ

寒林をゆくや自づとしづごころ

玲子

初鏡鶴の舞ふ帯胸高に

〃

寒林を抜けて光の湖映ゆる

義子

母と子の帯直し合ふ初鏡

〃

寒林の一樹一枝に力あり

水尾

寒林に研ぎ澄まされてゆく五感

佐江

紅淡くしなやかに立つ初鏡

〃

寒林や西洋館の赤い屋根

宣子

新調の眼鏡の笑顔初鏡

水尾

初鏡娘の手作りの割烹着

義子

文楽に誘はれはづむ初鏡

玲子

母から子へと椿油や初鏡

理恵

桃割れの少女の鬻や初鏡

美佐尾

由布岳を見守るやうに寒林群

はるみ

初鏡目の輝きは失はし

佐江

関西例会 (大阪)

森本早苗報

寒雀百羽の愚痴と自慢かな

早苗

初講義マニキュア赤き師の源氏

玲子

山里や砂切音誘ふ初詣

千津子

日溜りに小さき影曳き寒雀

ゆら女

寒雀芝生の色に混ざりけり

洋子

高みより降る鳥声を御慶とも

和子

冬晴やジャズ流しつづ壁を塗る

道子

新年の汽笛の響く港町

以上特選

初風や孤島の祠堂灯し

早苗

籠り居て寒雀めく我なりし

玲子

コ罗纳禍や雨に託け玉子酒

札子

杉戸絵を抜けてあそぶや寒雀

千津子

ゆら女

ゆら女

寒雀市道渡れば寺の墓地
鳶笛と海光まとふ初詣
玉砂利を胎の子と踏み初詣
三か所の中止を記す初暦
度忘れの漢字の多し初日記
コロナ禍の一夜かぎりの寒橋ぞ
寒雀お宿はどこと尋ねけり

洋子
和子
道子
千世子
千枝子
満耶子
さわゑ

昔話あれこれ13

女鳥王と速総別王の反逆

仁徳天皇は異母妹の女鳥王を妻にと所望し、異母弟の速総別王を仲人として遣わした。すると女鳥王は、「皇后さまの気性が激しいので、八田若郎女をお后にお迎えになれないとか。だから私も帝にはお仕えする気はございません。私は貴方様の妻になりましょう。」と言って、二人は結ばれた。

このため、速総別王は仲人としての復命をしなかった。

それで天皇は自ら女鳥王の所に出向いた。女鳥王は機を織っていた。天皇が「誰に着せようとしてせつせと織っているのか。」と尋ねると、女鳥王は

高行くや 速総別の 御糞料
(空高く飛ぶ隼 その速総別王の
ための着物でございます。)

天皇は女鳥王の気持ち察して宮中に帰った。

夫の速総別王が来た時の女鳥王の歌は

雲雀は 天に翔ける
高行くや 速総別 鷓鴣取らさね
(雲雀は空高く飛びます。隼はも
つと高く飛べるでしょう。鷓鴣な
んか取っておしまいなさいよ)

鷓鴣 仁徳天皇のこし

この歌を聞いて天皇は反逆の意志を読み取り、討伐の軍勢を出した。

逃避行の道すがら速総別王の詠んだ歌

はしたての 倉崎山を
嶮しひと 岩懸きかねて
わが手取らすも

(倉崎山は険しくて、か細い腕では岩に手を懸けることも出来ないのので君は私の手に縋りついたよ
ね)

また、速総別王の詠んだ歌

はしたての 倉崎山は
嶮しけど 妹と登れば
嶮しくもあらず

(倉崎山は険しいけれど。愛する君と二人で登るのだから、少しも険しいと思わないよ)

二人はそこから逃げ延びたが、宇陀の蘇邇で追討軍に打ち取られた。

天皇の絶対的な権力に逆らっても、愛を貫き、非業の死を遂げた二人。

悲しい話だが一種の爽やかさを感じる。

(つづく 丸山マスミ)

各地句会



りそな俳句会 (浦和)

松過ぎの日記の余白持て余す
初鏡吾が年輪の皺の数
夢ひとつ願ふ傘寿の初御空
門松に旧家の威厳残りをり
少しだけアルカイックスマイル年男
船欠航佐渡初風の波飛沫
元日や水を求めて鳥来たる
蕾笑む風の便りに春を待つ
言の葉の海に遊ぶや初句会

寛治 雅夫 曆文 道を 建治郎 久美子 京子 マシミ

寒の入庭の木立は黙を決め
代々の雑煮のレシビ嫁ぐ子に
寒蛭忘れ得ぬ味十三嬉
眼裏に滲む生家の寒灯
故郷がすまして見ゆる雑煮かな

真理 美智枝 道子 由紀子 幸代

喪帰りの一步の重し雪明り
雪明り黙して告ぐる愛もあり
万物の塵を掃ひて雪明り
氏神へ粧ふ紅あり青木の実
恙無き終の栖や青木の実

喜恵 政代 チアキ 燈女 佐江

新樹の会 (浦和)

繁華街柳の下の占ひ師
スクラムの力一トンラガーマン
独り占めしたき貴方の初日記
時止まるラガーのトライ大歓声
身を躲すラガーのリズム土を蹴り
肌色の違へど日本背負ふラガー
炬燵猫特等席を独り占め
ラグビーやボール二本にある不安

修 京子 正信 平通 徹雄 清吉 鶴城 俱子 山遊 重子 和子 藻好 輝翠

あゆみの会 (浦和)
願ひ事一つに決めて初詣
入賞の孫の書初め「嬉」なり
初めてやスマホで届く年賀状
未知の夢ぎゆつと詰め込む初暦
胸高にしむるお太鼓初鏡
星の如指に煌めく初手水

野菊の会 (与野)
足袋鞅一つ外して男坂
新しきひかりまばゆし冬木の芽
早暁の光あつめて春立つ日
検索に遊ぶあれこれお正月
水明小川句会 (小川)
武甲嶺巒くつきりと淑気満つ
冬すずめ涙一粒見てみたや
故郷へ駆けて行きたや雪搔きに
真つ新たな句帳靴に初旅へ

美代子 和子 知子 光子 綾子 きよ子 みや 栄子 徹行 正子 秀子 燈女 治江 栄子 茂子

雛の会 (浦和)

美子 公子 多美子 千恵 茂子

青木の実一緒に嫁して金婚式

水明熊谷句会 (熊谷)

国後は目と鼻の先岬呀ゆ
軒下の水柱をかじり友思ふ
軒水柱幽かに人の気配して
地蔵牙ゆ総身に願ひ札を貼られ
軒つらら窓辺に無垢の光り降る
尖りゆく峽の水柱に山気満つ
軒つららつらつら落つる里の家

水明熊谷句会 (熊谷)

桜林句会 (大宮)

翔るものみな輝けり初御空
人日やひとりぐらしの粥温し
初釜の師の唇に紅ほのか
闇こがす左義長の城崩れんと

山茶花 (浦和)

達観の百寿の賀状華やきて
年賀状だけのつき合ひ六十年
気を入れて曾孫四人に年賀状
風花や車走らす大阪へ
風花の天使舞ひ来て手を広く
さらさらと風花の舞ふ露天風呂

蘭の会 (浦和)

風見鶏ぐるりと年始告げにけり
時を待つあちらこちらで初日の出
冬萌や光に透くる色は何
楽しみは喰積駅伝年賀状
新年の朝日入れたり兩戸繰る
肅々と喜寿となる年迎へたり
冬萌や赤子抱きて氏神へ
御降や感謝する人濡れる人
冬萌や今朝の力の漲りぬ
冬萌や「元地」の札の新しき

知子 光代 光子 美佐尾
マスマ 泰子 美江子 清一 光子 綾子
風舎 さよ子 まりこ 比早子 トエ 粉雪 悦子 月を 鶴城 京子

芽吹句会 (浦和)

初景色風に唸るよ絵馬の虎
胴上げの襷ぞ重き初景色
故郷を走る駅伝初景色
日の矢さす森を間近に成人式
秩父嶺の稜線さやか初景色
昨日までの勢何処よ落葉かな
落葉掃く巫女のリズムは四拍子

さざきサークル (浦和)

裂帛の「礼」に始まる寒稽古
掛け声に幼もまじり寒稽古
寒稽古黒帯似合ふ恩師なり
潮騒の浜に群れ咲く野水仙
寒稽古リトルリーグで勝負する
太鼓打つ青天響く寒稽古
摺り足の指先真つ赤寒稽古
鶴川山百合句会 (町田)
客の來ぬ研ぎ屋一日ひなたぼこ
生も死も背中合せや日向ぼこ
うつし世のごとみな脱力す日向ぼこ
遣影まで陽の届きたる日向ぼこ
日向ぼこ自動掃除機肅々と
あらかたは鬼籍に入りぬ日向ぼこ

千重子 富子 修 ひろこ 玲子 チアキ 道を
俱子 喜代子 タイ 啓子 和枝 かつ子 和子
雄二郎 喜久 史代 広子 千春 萬蝶

和歌山水明句会 (和歌山)

満天の星の見守る浮寝鳥
寒稽古剣士見たいと無双窓
強風に枝よぢらせて梅一輪
何度も見える動画メールの年賀状
床柱に背丈の印おらが春
今年こそ会ひたしといふ年賀状
墨の香を浅く吸ひ込み筆始め
読初の奥の細道朗朗と

芙蓉句会 (浦和)

子守りして親の守りして日向ぼこ
日向ぼこ双子の嬰の虫笑ひ
光が丘俳句教室 (東京)
七種のみどりやさしく掬ひけり
赤パンツ買って菓鴨の初詣り
丁寧紅茶を淹れる二日かな
ランドセル背負ふ練習初笑ひ
活け終へて清楚に匂ふ水仙花
笑ひ皺ふかくなりたる初鏡
七草や女が匂ふ台所
川縁に戯れ合ふ二羽の初鴨
なまはげや童の怒濤聞こえけり
嫁して初母の手をとり初詣

理恵子 玲子 是る 康子 理恵
和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廼代
正子 道子 税子 ともこ 文子 美子

野ばらの会 (浦和)

三が日子の温もりにかこまれて
しきたりの薄れゆきたる三が日
団長は火の見櫓に布団干す
今か今かと蒲団干し待つ親ごころ
漸くに主婦の座譲り三が日
朝ぼらけ蒲団被りて続く夢

ミモザ句会 (横浜)

過疎の村朝陽のみこむ氷柱かな
臥す母のうつろな眼軒つらら
初電話姉の活力貰ひけり
藤井君翔平結弦今年顔
丸餅の父の好みし白雑煮
喪の家の精気いくばく寒卵
たて笛でたたく氷柱のハーモニ
代々の漬物小屋よ氷柱伸ぶ

若鮎句会 (浦和)

退屈なねこ呼びませうか嫁が君
初筑波日の出は富士に勝りをり
嫁が君監視カメラを覗きをる
細君の豊かなる腰嫁が君
静かなる寝台列車冬の星
新しき寝巻の馴染む三日かな

治江 栄子 夏江 茂子 秀子 みき子
由美子 史代 玲子 亜弥子 栄子 萬蝶 慶子 千春

流れゆく雲より出づる初筑波
妻を詠む万葉人や初筑波
初筑波ゴールテープを破る君
抜けた菌を屋根へ抛るや初筑波
聞きつかじりの知つたかぶりや嫁が君
嫁が君蘊蓄たれる米の味
蛸 蛸 の 会 (浦和)
裏白や向かひ合はせの汁粉椀
父と子の厨に立つや女正月
女正月笑ひ上戸の家系かな
濡れ菌朶の葉先を使ひ玉あそび
号砲は祝祭のごと箱根駅伝
ほんのりと紅さす昼間女正月
年賀状ビクトグラムの虎牙光る
麻雀と汁粉OK女正月
小流れのト音記号や冬の蝻
裏白や上手な嘘の真の意味
怒号飛び津波の寄せる冬の闇

阜月の会 (浦和)

北風の中を跳ぶ子等「けんけんぱ」
白黒の石を置く音楽の夜
胸隠し初風呂の椅子番を待つ
素振りの子みんな素足で寒稽古
番記者の眼鏡し冬の星

香音子 万美 順 月 鶴城 喜夫
風舎 朝香 元美 礼子 さち子 みるみ 月を 鶴城 宣子

焚火の音聞きて独りの世界かな
甘へ子の一礼凜と寒稽古
寒風や酒のにはひの待ち人來
水明松本句会 (松本)
枯葉手に我が人生を思ふかな
一大事サンタが検疫ひつかかる
北風に吹かれ寄り添ふ道祖神
さびしさに琴かき鳴らす北吹く日
たかな俳句会 (川口)
寒晴の夕日の海や古色千
寒晴に振袖の花開く朝
肩先に雪を積もらせ旅路ゆく
冬日和氷川の杜に鈴の音
蠟梅の枝奔放に里日和
蠟梅や絵馬縦書きか横書きか
蠟梅の日和に溶けて香りけり
先客と香り分け合ふ探梅行

花衣の会 (浦和)

兄の目の行き先追うて歌留多取
六道湖は寒満月を写し込む
寒中や皆んな無口で池巡る
少し開く窓より寒を部屋に入れ
寒卵立てる子供と根競べ

孝磨 曆文 きいち 陽子 マリス 玲子 寿子 久美子 福美 小麦 勢津子 義子 鶴城 水尾 静香 美佐尾 珪子 順子 紀子 静香 章嘉

円卓の会 (浦和)

よみがへる青春切符冬の旅
妙齡の尼の庵や春近し

雪女郎天使の羽がふうはりと

青眼の新木刀や寒稽古

水頭膾絶妙なや元朝膳

机の上に雲形定規小正月

晴天の宮の境内猿廻し

水明鬼石句会 (鬼石)

スマホ鳴る津波警報夜半の冬

山頂の蠟梅香る昼下がり

寒波来る庭の草木しんとして

早春に白内障の手術受く

輝きて我が家にとどく初日の出

珊瑚の会 (浦和)

大寒のローカル線に新車両

大寒やもどかしきかな杖の先

大寒の朝の味噌汁具沢山

大寒の水底冥き鯉の池

鳥の声聞き分けあるや冬木の芽

大寒の銚を正せし杉木立

千の枝に万の夢溜め冬木の芽

大寒の青空へシースルーのエレベーター

道修

静香

翔太

輝翠

月を

鶴城

和子

ナヲ子

紀子

洋子

聡子

広子

和葉

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

恵子

恵子

胸を刺す言葉きらりと冬木の芽
日をつむぎ言の葉つむぐ冬木の芽
大空へ命誇示する冬木の芽

水明澤つくし句会 (大阪)

荒波や毬の軽ろさに冬の鳥

そつば向く蛸から売れしおでん鍋

初場所や小兵押せ押せ電車道

どつと来てどどと飛び立つ寒雀

冬晴れの富士の雄姿を仰ぐ朝

窓開き空に始筆の夢一字

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

屠蘇酌むや三三九度の嫁が欲し

こげ癖の鍋をなだめつ年用意

ベッドから湯たんぼ落とす子の旨寝

散髪の襟に泣き癖ある日暮

冬木の芽風に泣き癖ある日暮

新弟子のぶつかり稽古冬木の芽

家康も吾も寅年屠蘇を酌む

赤ら顔で子が走り出すお屠蘇かな

初東風に絵馬の騒めく天満宮

俳句の手ほどき (山石楓)

正門にでんと校章日脚伸ぶ

日脚伸ぶすこし間延びの愛唱歌

史代

和子

節代

智恵子

人美

美令

洋子

富士桜

ゆら女

延昭

美枝子

俊晴

早都子

俱子

正信

千恵子

淑子

昇

延昭

倭子

天金の詩集の背文字日脚伸ぶ

日脚伸ぶ願ひの絵馬のすき間なし

花時計の円の有耶無耶春の雪

白鳥の円らな瞳水明り

日脚伸ぶ猫に貫ひし大あくび

散会の窓辺に筑波日脚伸ぶ

黒牛の太き尿よ日脚伸ぶ

日脚伸ぶ山が落暉を持ち上ぐる

土起こし日脚伸びたる空の下

茶一服円窓からの薄紅梅

明るさに少し寄り道日脚伸ぶ

円七つ石けり遊び日脚伸ぶ

粉雪や円筒埴輪に灯が点る

めだか句会 (浦和) 一月分

枝先に咲いた手袋主を待つ

手袋の両方なくす潔さ

病室にクリスマスケーキ囲む

捨てられぬ我が子使ひし豆ミトン

手袋を番侍つピアノ舞台袖

手袋や傘寿の荒れを抱きてクリスマス

くるみ割りトウを抱きてクリスマス

手袋や老い細る手に余りあり

缶コーヒー手袋の手に抱かれり

ギリシア文字に何故か詳しいクリスマス

煙突より高い梯子を降誕祭

佐江

水尾

ます美

義子

卓郎

徹平

忠男

翔太

幸代

美子

桂子

久美子

かつ子

美智

英美

智子

育子

敦子

八千代

真由美

謙一

はるみ

月を

鶴城

めだか句会 (浦和)

春近し喜び待ちて除水かな
宝登山の蛭梅揺する鈍な風
鳥の知る夜明けの違ひ春隣
春近しノコの齒の音のリズム良し
待春の淡色の空風優し

智子 謙一 育子 真由美 敦子

峠路の延命地藏春を待つ
日の光日毎明るし春を待つ
冬芽立つ幼女がひとりお使ひへ
倒れても冬芽遅し天目指す
冬木の芽跡継ぎ生まる安堵かな
光の粒とばし春待つ水車

正信 利子 翔太 紀子 寛治 順子

茶髪の子うまそに食らふ雑煮餅
今年また同じ顔ぶれ初句会
はつらつと披講の声や初句会
混迷の時世詠みたる初句会
精進の道半ばなり初句会

敦子 妙子 朋子 裕誌 治子

還暦を去る古希へ向ひてうららかな
透き通る「満月蛭梅」夜空にも
コロナ禍の二十日正月除菌除菌

美智 八千代

初鏡容顔美麗奥の座へ
初鏡八十路の皴こそわが人生
孫の来て写真撮りづめお正月

森山 洋子 美紗子

モノクロの景を震はせ冬の雷
杭一つ好きずきのあり都鳥
海鳴りや揚げ船に舞ふ百合鷗

恵子 和葉

坑央に除隊となりて冬の蟻
蛭梅や争ひのまだ絶えぬ星

月を 鶴城

新客や厨事後の初鏡
真に迫る推理ドラマや冬の夜
初鏡母似の背中丸くなり

美智枝 美子 啓子 公子 洋子 和子 輝翠

冬の雷たつた一つが鳴り籠る
冬の雷鍋を磨く手空を切る
ゆりかもめ寄せては返す波の音
冬の雷見る間に海の色かへて
空に綿雲海には今もゆりかもめ

光弥 かつ子 昇

神戸大池句会 (神戸)

磴上の響く拍手去年今年
寒晴や変はりなき日を佳しとして
寒鰯は故郷の便り恙無し
志納金納め三個の冬林檎

玲子 礼子 千津子 早苗

書初が行事となりて写真撮り
手になじむ萩のぐい飲み冬深む
冬深し軋む音する夜の屋根

りんどう俳句会 (浦和)

なりはひを果し春待つ庭いちぢり
特注のとんがり帽子冬芽笑む
春待つや巢籠りに堪へ早二年
春を待つ畑に続く靴のあと
沼の辺に和らぐ気根春を待つ
立ち向かふ答案用紙春を待つ

弘夫 サヨ子 君夫 卓郎 徹雄 治子

櫟の会 (浦和)

墨磨りて香清かな初句会
初句会慌て駆込む山頭火
初句会仕立おろしの袖着て
初句会愉しくもあり難かしき
コロナ禍の独りの雑煮これも良し
句心を呼び戻さねば初句会

彰二 克之 富子 文子 富美子 千重子

☆ ☆

水尾 俊晴 和子

一一〇〇号記念

作品募集

本年「五月号」が、水明創刊「一一〇〇号」に当たります。そこで五月号を「記念号」として、左記により作品を募集します。

ふるってご応募下さい。

兼題 「水」

詠み込み・通季（春・夏・

秋・冬・新年・いづれも

「明」可）で一句ずつ

締切 三月二十五日（発行所必着）

応募用紙は二月号に添付しました。

俳句

4月号 予告

3月25日発売

予価950円(本体864円)®

特別作品 一 大石悦子・今瀬剛一・石田郷子

俳句を読む愉しみ

▼総論 俳句の「読み」とは何か……………石寒太
▼予備知識不要の俳句の味わい方／知るともつと楽しい俳句の特徴／「読み」のリテラシー／読書案内 好きな俳句、俳人の見つけ方／オールタイム名句

大特集

変革期の俳人は 何をしたのか

宮坂静生／仁平勝／駒木根淳子／
井上康明／高柳克弘

特集

令和三年度 俳人協会賞各賞決定！

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明全国大会のご案内

【と き】 2022年7月6日（火曜日）

【と ころ】 浦和駅東口パルコ9階第15集会室

ロイヤルパインズホテル浦和、浦和パルコ第15集会室。詳細は5・6月号に発表。

【行 事】 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞他の授賞

新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。

兼題入選句の発表と授賞、講評等。

5、6月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは5月1日～6月15日にお願ひ致します。）

担当：総務部

特 集
四字熟語で寿ぐ、春

十組二十組社競詠

巻頭作品10句

片山由美子・佐怒賀直美・田島和生
永方裕子・中西夕紀・原田紫野
古田紀一・森野 稔

俳壇

4月号

3月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
細谷暁々

八木健道 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅲ期〕：佐怒賀直美・武藤紀子

色の歳時記……………津川絵理子

俳句文法 そのがポイント……………井上泰至

連 載

俳句史を見直す……………秋尾 敏

ものがたりのある俳句……………村上朝彦

先人のことば……………対中いずみ

小説・遙かなるマルキーズ諸島……………マブソン青眼

俳句と随想12か月

河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題 「行く春」(ゆくはる) 春の名残・春のかたみ・春の行方・春の別れ・春行く・春の果

「燕」(つばめ)

初燕・つばくらめ・川燕・里燕・群燕・夕燕・燕来る

※「行く春」「燕」は右の季語で詠む事

「大」詠込み

※「大」は季語として使わない事。春の季語を入れて詠む事。

例句 囀をこぼさじと抱く大樹かな 星野立子

大いなる春日の翼垂れてあり 鈴木花蓑

句数 通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円。

締切 五月十日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

春の吟行会中止のお知らせ

3月26日（土）に予定しておりました「春の吟行会」はコロナ感染症拡大のため、開催を中止致します。

臨時常任幹事会を招集し慎重に議論致しました。

会として開催の意欲は満々たるものがありますが、感染状況を鑑み残念ながら自重することと致しました。

令和4年2月

常任理事会幹事長 網野月を

本書の特色

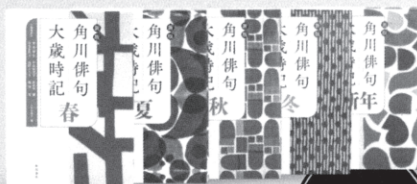
見出し・傍題合わせて1万8000季語以上を収録

旧版より110%以上増ページで、より充実した内容に

現俳壇を代表する俳人・研究者による監修・執筆

例句数5万句超。近年の秀句もふまへ

旧版から大幅に刷新



特設サイト
OPEN!



A5判/上製/函入
約700~800頁(予定)
各巻定価 5,995円

『刊行予定』『春』2022年2月28日/『夏』2022年5月/
『秋』2022年8月/『冬』2022年11月/『新年』2022年12月

2022年2月
『春』より
順次刊行

春
夏
秋
冬
新年

大歳時記

角川俳句

新版

圧倒的な季語数・例句数を誇る
俳句歳時記の最高峰、15年ぶりの大改訂!!

角川書店編
編集委員
茨木和生
宇多喜代子
片山由美子
高野ムツオ
長谷川權
堀切実



KADOKAWA

KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

風 声

○現代俳句一月号——「現代俳句の風」欄

まほらなる平成見納め初参賀 河原叔子

庭隅に遊びをりたる小春の陽 梅澤輝翠

底冷や鞆に捜す家の鍵 染谷正信

末広がりの孔雀の羽根や明の春 宮崎チアキ

待春の水辺の呼吸鳶の笛 由良ゆら女

○くぢら（中尾公彦主宰）一月号——「受贈俳誌美術館」欄

時雨忌の一本締め之余韻かな 鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）一月号——「受贈誌拝見」欄

企みのありさうな椅子秋の昼 鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）一月号——「受贈俳誌紹介」欄

一の糸替ふる仕種のさやけしよ 鬼之介

○雪嶺（石本石鬼主宰）一、二、三月号——「受贈誌」欄

夕焼ととことん語る独り旅 鬼之介

供花は鬼灯天に召されし女兒の部屋 ッ

○太陽（吉原文音主宰）一月号——「受贈誌御礼」欄

アラジンのランプ夜長の燈とならず 鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）一、二月号——「他誌拝見」欄

夕霧にしつぱり濡るる一つ紋 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）一月号——「諸家近詠」欄

企みのありさうな椅子秋の昼 鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）一月号——「諸家近詠」欄

企みのありさうな椅子秋の昼 鬼之介

○笥（山本一步主宰）一月号——「受贈誌の一句」欄

深山から転がり来る秋の雷 新 曆文

一叢の雨後の昴り昼の虫 曲淵徹雄

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和四年二月三十一日現在—

岡野順子 4 口 星野和葉 1 口

高原和子 3 口 日高道を 1 口

野口和子 3 口 石井喜恵 1 口

森 美枝子 2 口 茂木和子 1 口

新春俳句大会中止より 柚木治子 1 口

大村節代 1 口 本橋稀香 1 口

石山かつ子 1 口 —合計20口—

後記

先日「鳥羽谷」が届きました。何と二〇〇号記念特集号です。真つ先に七〇頁の鳥津城子先生の「創刊のころ」を読ませて頂きました。記事中には、城子先生はじめ、翠保、常人、柚二、孫左の皆様、明世先生やらみどり様のなつかしいお名前がちらほら。二代目主宰秋子先生似のみどり様は城子先生にも美しく映っていたのだと改めて思いました。小学校四、五年の弘さんとは鬼之介主宰の事でしょうか。

鳥羽谷は昭和二四年に創刊と、城子先生の文にあります。鳥羽谷は季刊紙なので年四回発行です。二〇〇号までの道のりは、大変だった事でしょう。若狭の皆様のご心意気と努力によって続いたのでしよう。城子先生、白鷺氏、ことしへと鳥羽谷は連繫され、守り囲む方々の厚い絆によってさらに充実し、発展される事と楽しみに致

しております。

「俳諧は老後の楽也」松尾芭蕉の一文を目にした折、えっ嘘と思いました。と言うのも私の如き者でも、若い時には、すらすら(?)と、言葉が、俳句が浮かびました。それが年を取ってきて、頭は空っぽで絞っても出てきません。芭蕉翁あなたは天才だから、老後の楽しみでしょうが、凡人には老後の苦しみその物ですと、心で呟いたりひがんだり……。

ところが、コロナが世界中を席卷して三年弱、人間は息を潜めて生きています。外出が困難になり、呆けたり、鬱になったり、大変な状況です。

そんな折、家籠もりでも一人でも詠む事が出来る俳句は、通信でも楽しめるので、近頃は俳句をやっている良かったと思っています。

一〇〇号記念、水・明の二句が三月二五日締切です。投句用紙は二月号に付いていますので、お忘れなき様お願いします。

(節代)

今月のはてな？

- 柳 (なぎ)
- 鮎 (いざな)
- 乙夜 (いつや)
- 点袋 (てんぶくろ)
- 年木樵 (としぎこり)
- 眇 (すがめ)
- 方便 (たつき)
- 槽火 (ほたび)
- 胼胝 (たこ)
- 旨寝 (うまい)
- 尿 (いばり)

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)
 時間：12時半～午後4時半
 (火・木・土・日・祭日は休み)
 水明の行事と重なった時は休み
 (上記の時間には係がおりますので、
 ご用の方は 時間内をお願いします。)

67 67 58 58 53 52 43 34 33 21 15 頁

水明

令和四年三月号
 通巻一〇九八号
 令和四年三月一日発行

発行人

山本 鬼之介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二八
 電話 048-886-1600三

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇二二
 電話 048-822-474一

誌代

半年分 六、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 一二、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所

中央美版

山紫集

六月号 三月二十五日締切

氏名(俳号)

三月の兼題

「鶯」

(傍題可)

投句対象者

同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

支へある松自立する松雪しづく
厨より背伸びして見る初日の出
床の間に武具の一領日脚伸ぶ
差向ひあといくたびを齋粥
寒禽や大きく傾ぐ竹矢来
氣負ひなく白磁に落とす寒卵
天金の詩集の背文字日脚伸ぶ
母と子の帯直し合ふ初鏡
老医師と婦長のあ・うん冬日和
初騎の馬の鬣編み上げて
初風のひかりを進む走者かな
曜変天目表紙を飾る初曆
初鏡鶴の舞ふ帯胸高に
陶の牛納戸に戻る年の暮
先客と香り分け合ふ探梅行
冬至粥真ん中に居る母の皺
妙齡の赤き襷や弓始め
初景色風に唸るよ絵馬の虎

網野月を
石井喜恵
石山かつ子
大橋廸代
大村節代
小倉倭子
梅澤佐江
森川義子
松井由紀子
内田恵子
大場順子
丸山マシミ
井上玲子
近藤徹平
野田静香
日高道を
青木鶴城
熊倉千重子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

地母神の深き眠りや大枯野
 仲人の粹な都々逸金屏風
 おほつぴらに軋む江ノ電冬めける
 白鳥や暮色の影にこぼれ入る
 冬木蔭理科室にある人体図
 鮪詰めの出雲の宿舍神の旅
 昼月を背にして走る枯野道
 薄色のニンフの棲まふ冬木立
 寒紅やグラスの縁をなぞる指
 化学式諳んじてみる河豚の毒
 ほとほとと夫がそば打つ年の暮
 準備整ふ干支の置物年の暮
 ビル案内のロボット走る年の暮
 元朝や金の箔押し夫婦箸
 お宮の松に女かしまし冬日和
 鮫鱈や縄文の世の面構へ
 冬の月何故か反省うながさる
 漆喰壁にその影落とし冬の蝶

西幅公子
 染谷正信
 曲淵徹雄
 新 曆文
 反町 修
 保坂翔太
 笹本啓子
 元田亮一
 檜鼻ことは
 原田秀子
 神田治江
 越田栄子
 丸屋詠子
 梅澤輝翠
 橋本京子
 横山君夫
 山岸久美子
 渋谷きいち

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山田みどり 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 昇 明 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境 延昭 石 井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石 田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋 勉代	森本 早苗

水 明 令和四年三月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第三号) 定価 一〇〇〇円